

第248図 浜ノ町遺跡における珪藻化石分布図(1%以上の分類群を表示)

第4節 香川県浜ノ町遺跡の珪藻化石群集

パレオ・ラボ 黒澤一男

1. はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小（0.01～0.5mm程度）ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは香川県浜ノ町遺跡から採取した試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

2. 試料及び分析方法

分析試料には、浜ノ町遺跡Ⅰ区SX717の16層、20-21層、22層の3試料を用いて、以下の珪藻分析をおこなった。

- ① 試料を湿润重量で約1.5g程度取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- ② 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回程度繰り返し、ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。
- ③ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレバラートを作成した。
- ④ 各プレバラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料はプレバラート全面について精査した。

3. 硅藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）により設定された環境指標種群に基づいた。小杉（1988）は汽水～海水域における環境指標種群、安藤（1990）は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広域種として、海水種と汽水種は不明種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に小杉（1988）と安藤（1990）において設定された環境指標種群の概要を記す。

外洋指標種群（A） 塩分が35%以上の外洋水中を浮遊生活する種群。

内湾指標種群（B） 塩分が26～35%の内湾水中を浮遊生活する種群。

海水藻場指標種群（C1） 塩分が12～35%の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群。

海水砂質干潟指標種群（D1） 塩分が26～35%の水域の砂底に付着生活する種群。

海水砂質干潟指標種群（E1） 塩分が12～30%の水域の泥底に付着生活する種群。

汽水藻場指標種群（C2） 塩分が4～12%の水域の海藻や海草に付着生活する種群。

- 汽水砂質干潟指標種群 (D2) 塩分が 5 ~ 26% の水域の砂底に付着生活する種群。
- 汽水砂質干潟指標種群 (E2) 塩分が 2 ~ 12% の水域 (塩性湿地など) の泥底に付着生活する種群。
- 上流性河川指標種群 (J) 河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。
- 中～下流性河川指標種群 (K) 中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。
- 最下流性河川指標種群 (L) 最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。
- 湖沼浮遊性指標種群 (M) 水深が 1.5 m 以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。
- 湖沼沼沢湿地指標種群 (N) 沼澤ならびに前述した湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。
- 沼沢湿地付着生指標種群 (O) 水深が 1 m 内外で、湿地および植物が一面に繁茂しているところに生息する種群。
- 高層湿原指標種群 (P) ミズゴケを種とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。
- 陸域指標種群 (Q) 前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群 (陸生珪藻)。

4. 珪藻化石群集の特徴

検出された珪藻化石は、海～汽水種が 23 分類群 12 属 18 種、汽水種が 10 分類群 5 属 8 種、淡水種が 4 分類群 4 属 4 種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、海水～汽水種が 3 種群、淡水種が広域種を含め 2 種群である (表 1)。これらの種群の出現状況から 2 つの珪藻帯が設定される (図 1)。以下にその特徴と堆積環境について述べる。

I 帯 (20・21 層、22 層)

検出された珪藻殻が 4 個、6 個と非常に少ないため、堆積環境を推定することはできない。なお検出された珪藻種には、内湾指標種群の *Melosira sulcata*、*Cyclotella stylorum* や海水泥質干潟種群の *Nitzschia cocconeiformis*、また 22 層では淡水種も確認される。

II 帯 (16 層)

堆積物 Ig 中の珪藻殻数は 6.46×10^4 個、完形殻の出現率は約 37% となる。この II 帯は海水泥質干潟指標種群の *Nitzschia marginulata* が特徴的に出現し、同指標種群の *Nitzschia acuminata*、*Navicula marina*、*Diploneis smithii* や陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が随伴して出現する。これらのことから海水泥質干潟環境であると推定される。

5. おわりに

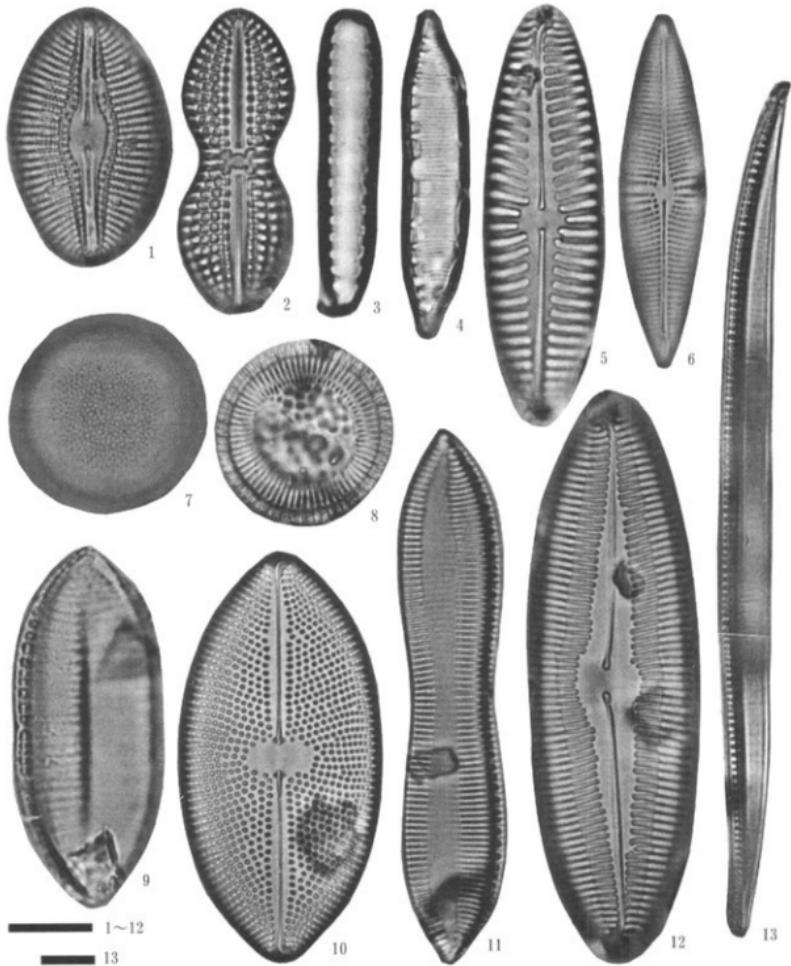
浜ノ町遺跡の堆積物中の珪藻化石を分析した結果、2 試料 (古代以前; I 帯) からは珪藻化石があまり検出されなかった。それは 2 試料が砂質堆積物であることから珪藻殻の堆積しづらい環境下であったと考えられる。17 世紀初頭の堆積環境 (II 帯) が海水泥質干潟環境と推定される。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地誌、42、73-88。
小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究、27、1-20。

分類群	種群	16層	20・21層	22層
Actinocyclus spp.	?	-	1	1
Amphora proteus	?	2	-	-
Coscinodiscus spp.	?	1	-	-
Campylodiscus lineatus	?	3	-	-
Grammatophora macilenta	B	1	-	-
Melosira nummuloides	?	28	-	-
M. sulcata	B	-	2	1
Navicula marina	E1	7	-	-
N. spp.	?	1	-	-
Nitzschia acuminata	E1	11	-	-
N. angilaris	?	1	-	-
N. cocconeiformis	E1	-	1	-
N. constricta	?	1	-	-
N. marginulata	E1	53	-	-
N. spp.	?	11	-	-
Thalassionema nitzschioides	A	3	-	-
Caloneis westii	?	22	-	-
Cyclotella stylorum	B	1	-	1
C. spp.	?	1	1	-
Diploneis bombus	?	3	-	-
D. smithii	E1	4	-	-
Nitzschia littoralis	?	5	-	-
N. sigma	?	6	-	-
<hr/>				
Achnanthes brevipes	?	3	-	-
A. spp.	?	1	-	-
Gyrosigma attenuatum	?	1	-	-
G. spp.	?	8	-	-
Navicula cruciula	?	13	-	-
N. lanceolata	?	1	-	-
N. peregrina	?	2	-	-
N. salinarum	?	1	-	-
N. yarrensis	?	6	-	-
Rhopalodia acuminata	?	2	-	-
Terpsionoe americana	?	-	1	-
<hr/>				
Diploneis yatukaensis	W	4	-	-
Gomphonema clevei	W	1	-	-
Hantzschia amphioxys	Q	4	-	-
Pinnularia cardinaliculus	W	-	-	1
<hr/>				
外洋 (A)		3	-	-
内湾 (B)		2	2	2
海水泥質干潟 (E1)		75	1	-
不定または不明 (?)		85	2	1
<hr/>				
不定または不明 (?)		38	1	-
<hr/>				
陸域 (Q)		4	-	-
広布種 (W)		5	-	1
<hr/>				
珪藻種数		212	6	4

第7表 硅藻化石産出表(種群は小杉(1988)および安藤(1990)に基づく)



珪藻化石顕微鏡写真 (スケール: 10 μm)

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1.Diploneis smithii | 2.Diploneis bombus |
| 3.Thalassionema nitzschioïdes | 4.Hantzschia amphioxys |
| 5.Navicula yarrensis | 6.Navicula crucicula |
| 7.Melosira nummuloides | 8.Cyclotella stylorum |
| 9.Nitzschia littoralis | 10.Navicula marina |
| 11.Nitzschia marginulata | 12.Caloneis westii |
| 13.Nitzschia sigma | |

第5節 浜ノ町遺跡出土製鉄関連遺物の分析調査

安来市体育文化振興財団和銅博物館 村川義行

浜ノ町遺跡発掘調査で出土した製鉄関連遺物について分析調査した結果を報告する。

1. 遺跡の概要

浜ノ町遺跡は香川県高松市浜ノ町・錦町に所在し、中世段階（13～15世紀）では瀬戸内海に面した砂堆上に立地する集落が形成されている。その後16世紀末（1588年）に、遺跡周辺は高松城城下町として整備されている。調査資料No.1（HNM-1）は13世紀後半～14世紀前半の土坑（SK 016）中から出土した。共伴遺物は少量の土器（食器・煮炊具）のみである。また、鍛冶関連の遺構は認められていない。調査資料No.2（HNM-2）は17世紀前葉の護岸用の石積が破壊されたと思われる集石中から出土している。ただし、この中には14世紀前半段階の遺構・資料が混入した可能性もある。

2. 供試材明細および分析調査方法

2-1. 供試材

第8表に資料明細を示す。

No.	遺跡名	層位・遺構名	推定年代	重量(g)
HNM-1	浜ノ町遺跡	SK 008	14 C	76
HNM-2	浜ノ町遺跡	SX 001	14～15 C	276

第8表 資料明細

2-2. 調査項目および方法

(1) 目視観察

目視による外観形状、色調などの観察。

(2) 顕微鏡組織

実測図に示した位置から切出して樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの3μ～1μで仕上げてから金属組織および鉱物相を観察した。

(3) 硬度測定

鉄滓の鉱物相と金属鉄の組織同定を目的として、ピッカース微小硬度計を用いて硬さを測定した。試料は顕微鏡観察試料を供用した。

(4) 化学組成分析

供試材の化学組成分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (T·Fe)、金属鉄 (M·Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

硫黄 (S) : 燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、五酸化磷 (P_2O_5)、バナジウム (V_2O_5) : 誘導結合プラズマ発光分光分析 (ICP 法)。

3. 調査結果

3-1. HNM-1 : 鉄滓

(1) 目視観察

厚手の楕円形滓の1部と思われる。側面の1部に自然面を有し、他は破面で囲まれている。上面はミミズ腫れ状の痕跡が残る流動肌で下面は丸味を帯びた凸形で細かいシワ状の凹凸からなる。色調は上面および側面が鉄錆色、下面是灰褐色である。磁着は弱い。

(2) 顕微鏡組織

写真2-①、②に示す。中心に空孔を有する粒状物が結合した様相を呈し、金属錆化鉄あるいは粘土溶融物のように見えるが顕微鏡組織からは断定できない。

(3) 硬度測定

写真3-①にピッカース微小硬度計（荷重 100 g）の測定圧痕示す。硬度値は 338HV を示し比較的柔らかいことから錆化鉄と推定される。

(4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第9表に示す。また、これらをまとめた結果を第10表に示す。金属鉄 (M·Fe) は 0.01% 以下、全鉄分 (T·Fe) は 22.41% で非常に低い値である。また、ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) は 53.04% で非常に高く、とくに SiO_2 、 Al_2O_3 が高い。また、 MnO も高い数値を示す。一方、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) は 32.04% でやや高い値であるが、酸化第1鉄 (FeO) は 0.01% 以下で皆無であり、錆化鉄にもガラス質鉄滓にも該当しない化学組成を示すものであることから、粘土が溶融したガラス質と錆化鉄が混在するものと思われるが、X線回折などによる確認を要する。

3-2. HNM-2 : 鉄滓

(1) 目視観察

楕円形の平面で、V字形の断面形を呈する。楕円形滓と思われるが 3 分の 1 面は破面であるが、大きな気孔が認められこれを起点として割れたと思われる。上面は破面が進展し、自然肌の残留は少ないがやや滑らかな感じである。下面是凸形ながら肌はかなり凹凸で木炭痕も認められる。磁着は非常に弱い。色調は灰褐色と赤褐色の混合である。

(2) 顕微鏡組織

写真2-③、④に示す。灰白色の球状体はウスタイト(FeO)、灰色の棒状あるいは木ずれ状の結晶はファイヤライト(2FeO·SiO₂)で鍛冶滓の組織の特徴を示す。淡灰色でポーラスな粒状化合物は金属鉄が鉄化したゲーサイト(FeO·OH)であると思われる。

(3) 硬度測定

写真3-②にピッカース微小硬度計(荷重100 g)の測定圧痕示す。灰白色の球状体の硬度値は367HVを示し、文献硬度値^①450～500HVに対してやや低めであるが、形状・色調よりウスタイト(FeO)と判断される。

(4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第9表に示す。また、これらをまとめた結果を第10表に示す。

金属鉄(M·Fe)は0.19%である。全鉄分(T·Fe)は55.83で高めであり鍛冶滓範囲の値である。また、ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO)も11.69%で低いことから鍛冶滓的な数値である。一方、酸化第2鉄(Fe₂O₃)は60.79%で高い値で、酸化第1鉄(FeO)は16.88%で低いことから、酸化性雰囲気下で形成された鉄滓であることから鍛錬鍛冶滓と判断される。砂鉄特有の二酸化チタン(TiO₂)は0.31%で低い値であることから原料が鉄鉱石であるとも考えられるが、二酸化チタン(TiO₂)は精錬によりかなり減少するので鍛錬鍛冶滓としてみれば砂鉄系原料を始発とした可能性は否定できない。また、バナジウム(V₂O₅)が0.17%であり鉱石原料としては、やや高い値であることから砂鉄系原料とするのが妥当と思われる。

NSG	SiO ₂	MnO	P	S	CaO	MgO	V ₂ O ₅	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	Fe ₂ O ₃	T·Fe	M·Fe
1	40.64	4.23	1.13	0.0078	1.91	0.81	0.031	0.16	9.68	<0.01	32.04	22.41	<0.01
2	9.72	0.07	0.070	0.187	0.49	0.12	0.17	0.31	1.36	16.88	60.79	55.83	0.19

第9表 化学成分分析値(wt%)

No	T·Fe	Fe ₂ O ₃	FeO	TiO ₂	V ₂ O ₅	TiO ₂ /T·Fe	ガラス質成分
NSG 1	22.41	32.04	<0.01	0.16	0.031	0.0071	53.04
NSG 2	55.83	60.79	16.88	0.31	0.17	0.0055	11.69

第10表 化学組成まとめ

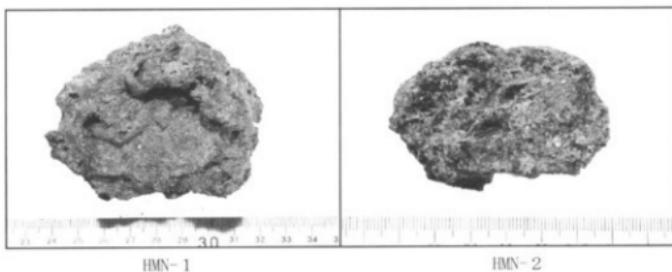
4.まとめ

資料HMN-Iは粘土が溶融したガラス質と鉄化鉄が混在するものと思われる。HMN-2は砂鉄系原料を始発とする鍛錬鍛冶滓と判断される。

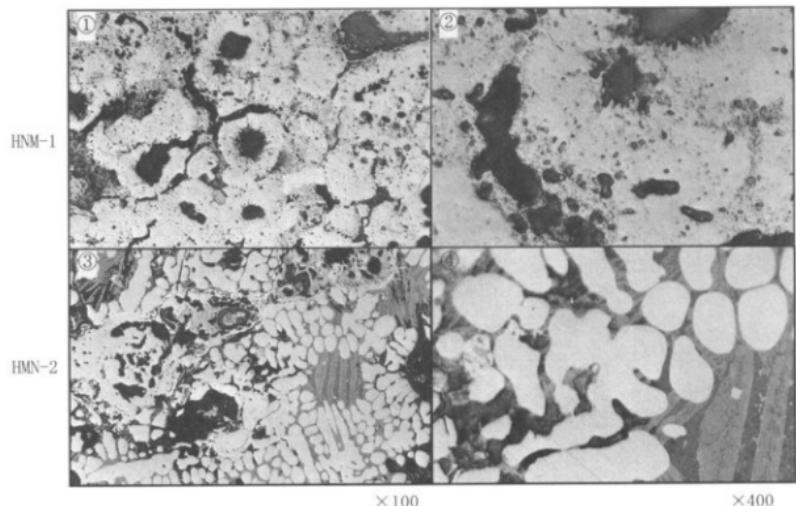
本調査の分析は日立金属(株)冶金研究所およびハイメック(株)中国事業所で実施した。

参考文献

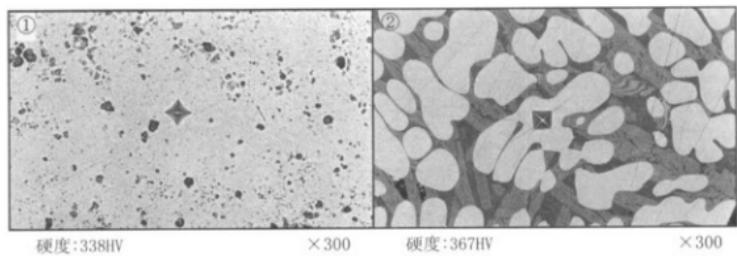
- (1) 日刊工業新聞社:「焼結鉱組織写真および識別法」1968



調査資料の外観



資料の顕微鏡観察組織



資料の硬度測定圧痕（荷重100 g）

第5章 調査の成果

第1節 14～15世紀の土師質土器杯編年

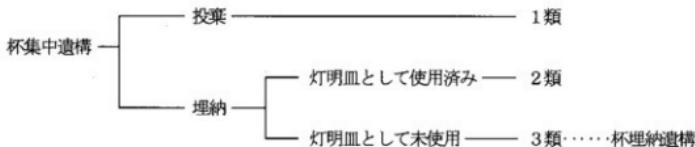
1. はじめに

中世前半（14世紀前葉まで）の高松平野における中世土器の編年についてはすでに公表されている（佐藤編2000）が、本遺跡で本格的に集落が展開する13世紀末～15世紀の土器編年は、丸亀平野を中心とした土器編年（片桐1992）、国分寺楠井窯での編年（佐藤1996）を除いて行われていない。

そこで本節では、個別遺構の変遷を捉えることを目的として、本遺跡内に普遍的にみられる在地産の土師質土器杯土器を対象とした編年を行う。その方法として、まず各形式内の型式組列を明らかにし、各型式の共伴関係については、一括性の高い遺構からの出土状況で確認を行い、段階を設定する。その後、共伴する他の年代が明らかな遺物によってそれぞれの段階に絶対年代を付与することとする。

2. 土師質土器杯・小皿埋納遺構について

浜ノ町遺跡では、土師質土器杯（小皿）が集中して出土する遺構が複数存在する。この杯集中遺構については、杯の出土状況と使用痕から3種類に分類することができる。出土状況からは、明らかに投棄（廃棄）されたもの（1類）と掘り込まれた遺構内に埋められたものに分けられる。さらに埋められたものについては、杯に灯明皿としての使用痕が認められるもの（2類）と認められないもの（3類）に分類可能である。さらに3類の特徴として、杯が重ねて埋められていることが挙げられる。この3類については、使用に伴う廃棄とは考えられず、なんらかの目的で埋納を行った遺構であることが確実なため土師質土器杯・小皿埋納遺構（以下、杯埋納遺構）と呼ぶこととする。これらを簡潔に示すと



となる。

1類にはSD 009下層に投棄された状態で検出されたSX 022が該当し、出土した杯の大多数には煤の付着が確認できる。2類にはSX 406が相当し、多くはないものの灯明皿として使用されたと考えられる杯を含む。3類にはSK 212のように浅い土坑や、SP 6011のようなピット状の遺構がある。従来「地鎮遺構」として捉えられている遺構は3類に含まれる。いずれも出土した杯に灯明皿としての使用痕は確認できない。調査時の不手際により掘り込みを確認できなかったが、

杯の出土状況と杯に煤が付着していないことからSX 300やSX 407も3類と推測できる。

1～3類の杯集中遺構は、広義の廃棄・埋納の範疇で捉えられ、一括性の高い資料であるが、「使用」の過程を踏んでいない3類はより共時性を示す可能性が高い資料と考えられる。よって、次節以降では、杯の分類基準および型式の共伴関係について3類（杯埋納遺構）の出土状況を重視することとする。具体的には、1基の杯埋納遺構から出土した同形式の複数個体については同一型式であると判断し、複数形式が存在する場合は共時性を示すものとして扱う。

3. 分類

1 形式

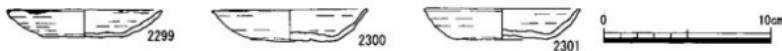
体部が直線的に立ち上がり、底・体部間に明瞭な境界が認められない。回転ナデによって口縁部を成形した後、体部を回転ナデで仕上げる「口縁部→体部ナデ手法」が主流。変化の方向性は、口径・底径の縮小化、器高の低下が挙げられるが、1d型式以後は底径の縮小化のみとなる。佐藤D II 形式。

1 a 型式 杯集中遺構2類のSX 406出土資料を指標とする。口径は10.3～10.7cm、高さは2.6～2.9cm。色調は灰白色～浅黄橙色で「白色系」に属する。佐藤D II - 7型式。

1 b 型式 この型式の杯埋納遺構は認められないが、SE 602出土資料が本型式に該当する。色調が浅黄橙色を呈し、「白色系」の一群であると考えられる。佐藤D II - 8型式。

1 c 型式 SK 661・SP 6011出土資料を指標とする。口径は9.4～10.1cm、高さは1.9～2.3cm。灰白色～にぶい黄橙色を呈する「白色系」と、にぶい橙色～橙色の「橙色系」がある。

1 d 型式 SK 212と杯埋納遺構ではないがSP 2001出土資料を指標とする。色調はにぶい橙色を呈し、「橙色系」の一群に含まれる。



第249図 SP 2001出土遺物

1 e 型式 SX 407出土資料を指標とする。口径は8.8～8.9cm、高さは1.6～1.9cm。色調は橙色を呈する「橙色系」のみである。ただし、西打跡B3区のピットでは浅黄橙色の「白色系」が認められ（山下・信里2002）、本型式には橙色・白色の色調による分化がかなり明瞭であるといえよう。

2 形式

体部外面中位に強い回転ナデにより生じた窪みをもつ。また、底・体部境内外に強いナデが施されることで、底・体部境に明瞭な屈曲部が形成されている。口径・器高は同時期の1形式とほぼ同じであるが、底径はやや大きめである。全ての個体に「口縁部→体部ナデ手法」が確認できる。

2 a 型式 当型式に該当する資料として、SE 602出土501が挙げられる。色調は浅黄橙色～にぶ

い黄橙色を呈し、「白色系」の一群に属する。

2 b 型式 SK 661・S P 6011 出土資料を指標とする。口径は 9.5 ~ 10.1cm、高さは 1.9 ~ 2.3 cm。「白色系」に含まれるにぶい橙色を呈するものと、「橙色系」に含まれる橙色ものがある。

2 c 型式 SK 212 出土資料を指標とするが、やや大振りなため 2 b 型式の可能性も否定できないが、体部の立ち上がり角度を重視して当該型式とした。

2 d 型式 杯埋納遺構ほかの一括資料中には当該型式に相当するものは認められないため、1120 を当該型式としておく。

3 形式

体部は直線的に立ち上がるが、1・2 形式に比べ口径と底径の差が小さい。「口縁部→体部ナデ手法」は認められない。

3 a 型式 SK 661 出土資料を指標とする。口径は 9.5 ~ 10.1cm、器高は 1.9 ~ 2.1cm。色調が橙色を呈することから「橙色系」に含まれる。

3 b 型式 杯埋納遺構ではないが、S P 2001 出土資料を指標とする。口径は 9.4 ~ 9.5cm、器高は 1.8 ~ 1.9cm。「白色系」で色調は浅黄橙色～にぶい橙色を示す。

4 形式

S X 300 出土資料を指標とし、体部は直線的に立ち上がり、1 形式に比べて器壁が厚い。丁寧な仕上げのため、回転ナデの痕跡が明瞭ではない。また、「口縁部→体部ナデ手法」は認められない。口径・底径比や体部の立ち上がる角度などの形態的特徴は 1 形式と共通するが、調整手法・胎土・色調が異なる。胎土・色調は 5 形式に類似する。口径は 8.9 ~ 9.1cm、器高は 1.8 ~ 1.9cm。浅黄橙色～にぶい橙色を呈する色調の「白色系」である。

5 形式

S X 530 出土資料を指標とする。体部は直線的に立ち上がり、口径と底径の差が小さい。器壁は 1 ~ 3 形式に比べて厚く、「口縁部→体部ナデ手法」は確認できない。胎土や色調、丁寧な仕上げは 4 形式と同様である。口径・底径比から、3 形式を意識した形態であると思われる。口径は 8.1 ~ 8.4cm、器高は 1.6 ~ 1.7cm。4 a 型式と同様、色調は浅黄橙色～にぶい橙色を呈する。「白色系」。

6 形式

体部は直線的に立ち上がり、底・体部の境界が明瞭ではない点は 1 形式と同様であるが、器高は著しく低い。

7 形式

2 形式同様、底・体部に明瞭な屈曲部と体部中位外面に瘤みが認められ、「口縁部→体部ナデ手法」による成形が行われている。ただし、2 形式に比べて器高はかなり低い。

8 形式

器高が低い点は6・7形式と同様であるが、両形式に比べて口径・底径の差が小さい。

9 形式

手捏ね成形である京都系土師器皿の影響を受けた、回転ナデ成形による在地産の土師質土器杯。体部中位から口縁部にかけて外反するもの(468)、底部が突出するもの(1033)など数種類の形態的特徴がみられる。他形式のものに比べてかなり大振りである。

4. 編年

各型式の組み合わせ

第11表は、指標とした造構での型式の組み合わせを示したものである。この表からは、1 b型式・2 a型式(S E 602)、1 c型式・2 b型式・3 a型式(SK 661・S P 6001)、1 d型式・2 c型式・3 b型式の共伴(SK 212・S P 2001)が捉えられ、この3ケースを定点にして段階の設定を行った。

遺構名	1 形式					2 形式				3 形式		4 形式	5 形式
	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	2 a	2 b	2 c	2 e	3 a	3 b		
S X 406	○												
S E 602		○				○							
SK 661			○				○			○			
S P 6001			○				○						
SK 212				○				○					
S P 2001				○							○		
S X 407					○								
空港跡地 SK c 74									○				
S X 300											○		
S X 530												○	

第11表 杯型式組成表

共伴関係不明型式の位置

2 e型式は1 e型式に比べて若干器高が低く、器壁も薄いことから1 e型式段階よりも降るとと思われる。

1 f型式については、器高の低さから1 e型式の次段階としたが、2 e型式との共伴関係については不明である。

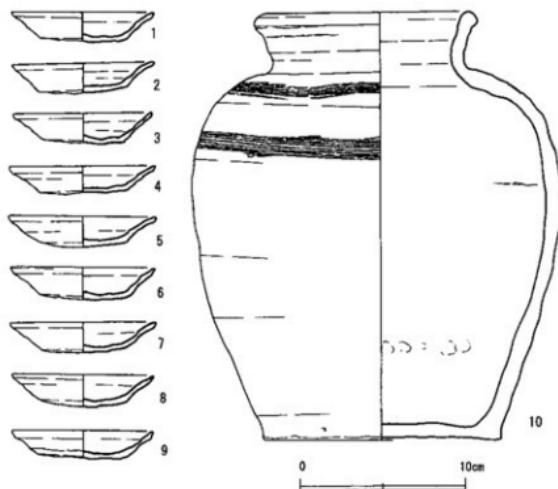
4形式は、口径・器高がほぼ共通することから1 e型式に並行する段階と考えられる。

5形式については、胎土・調整・器壁の厚さを除いた形態的特徴が3形式に類似することから、3形式の型式変化の中で検討を行い、3 b型式より2段階降る位置とした。

6・7・8形式は、いずれも器高が著しく低いことから2 e型式段階よりも降る時期であるとした。

5. 絶対年代

1 a 型式(佐藤D II - 7型式)は、13世紀末～14世紀前葉の年代が与えられている(佐藤編 2000)。本遺跡においても、S E 101からは1 a 型式に共伴して、森田第III期第2段階(14世紀前半)の東播系須恵器鉢、乗岡中世2 b 期(14世紀前葉)の備前擂鉢が出土していることから、1段階は13世紀末～14世紀前葉と考えられる。



第250図 空港跡地遺跡SKC 74出土遺物 (S=1/3)

S E 602出土資料では1 b 型式・2 a 型式の杯に森田第III期第2段階の東播系須恵器鉢(510・511)が共伴することから、2段階については14世紀前半を下限とするものと考えられる。

空港跡地遺跡SKC 74では2 e 型式の杯と乗岡中世4 a 期の備前壺が共伴し、6段階が15世紀前葉を下限とする年代であると考えられる。

3～5段階は、いずれも年代決定の根拠が乏しいため、とりあえず2段階(14世紀前半)～6段階(15世紀前葉)の間を均等割りすることで年代を想定した。

同じく年代決定が困難である6・7・8形式は、本遺跡内に確実に16世紀前半に降る遺物が認められないことから、15世紀中葉～末の範囲内で収まるものと考えられる。

京都系土師器皿の模倣形態である9形式は、5段階以降の杯を含む遺構から出土する傾向があり、3段階までの杯と共にないことから4～5段階に出現し、その後も継続すると考えたい。

1段落		1形式 1 a型式						
13c末			1141	S X406				
14c 前半			1142	S X406				
2段落		1 b型式						
14c 前半			499	S E602	2形式 2 a型式		501	S E602
			500	S E602				
3段落		1 c形式			2 b型式			
14c 中葉～ 第3回 半期			837	S K601		835	S K561	3形式 3 a型式
			1338	S P6011		1339	S P6011	836 S K661
4段落		1 d型式			2 c型式			3 b型式
14c 後葉			653	S K212		654	S K212	1246
			2299	S P2001		719		2301 S P2001
								9形式
5段落		1 e型式			2 d型式			
14c末			1149	S X407		1120		4形式
15c 初葉			1198	S X407			874 S X300	
6段落		1 f型式			2 e型式			5形式
15c 前葉			1119			空港跡地 SK c74		1150 S X530
						空港跡地 SK c74		1151 S X530
7段落		6形式			7形式			8形式
15c 中葉			766			1029		
15c 後葉			751			1028		752

S=1/4

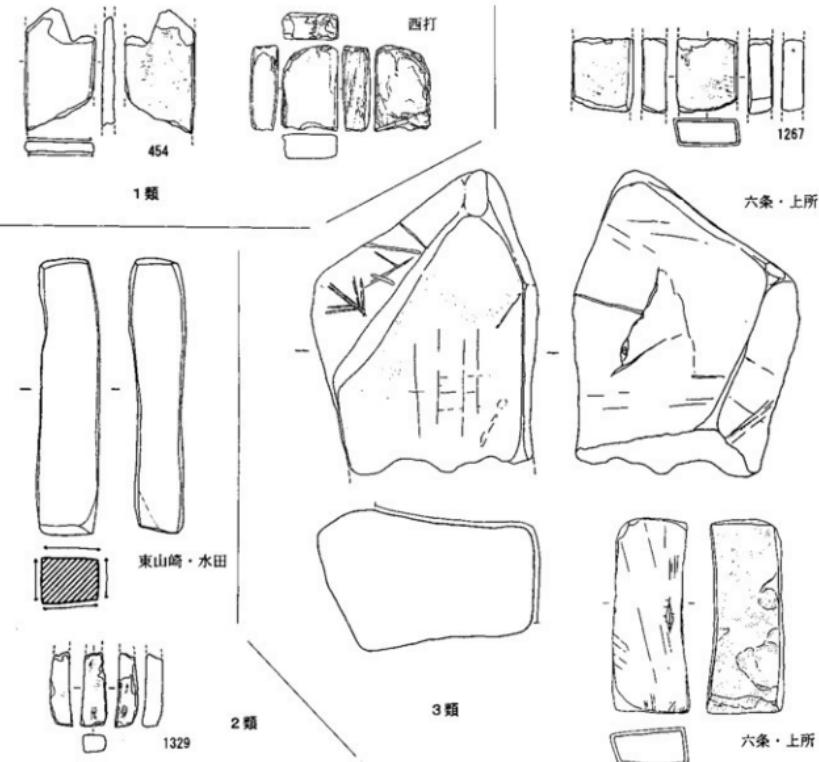
第251図 14～15世紀の土師質土器杯編年図

第2節 高松平野中世遺跡出土の砥石について

1. はじめに

中世遺跡から出土する砥石については、産地同定や流通から見える社会背景の分析といった観点からの研究が進んでいる（福島 1996・汐見 1999・田中 2000）。

ここでは、高松平野の中世遺跡から出土する砥石について分類を行い、そのうち確実に搬入品であると判断できるものについての出土比率（量）を明らかにすることで、平野内における砥石の流通状況を明らかにすることを目的とする。



第252図 砥石分類図 (S=1/3)

2. 分類

ここでは、砥石の石材と形状から分類を行った。砥石の石材と形状は、産地と機能的側面（粗砥・中砥・仕上げ砥）に結びつくと考えるためである。

1類

頁岩、もしくは緻密な流紋岩を石材とし、両長側縁長が約1寸（約3.03cm）強の短冊形を呈するもの。長側縁の側面には、成形時の鋸（弦鋸）痕と思われる線状痕が認められる。1面もしくは2面が使用され、側面4面に使用痕は確認できない。

石材・形状の特徴から、大工道具の様に繊細な刃先を要求されたり、古来日本独特の「引いて」切る刃を付けたりするのに適している（汐見1999）「仕上げ砥」として用いられたと考えられ、福島1996での「頁岩製砥石」に合致する（註1）。また、現京都市右京区北西部の愛宕山を中心とした一帯で産出される「鳴滝砥」（汐見1999）もしくは「京都産砥石」（田中2000）である可能性が高い。

2類

基本的には白色～淡褐色の流紋岩を石材とする。方柱状を呈し、長辺に隣接する面1～4面に使用痕が見られる。度重なる使用のためか、長辺部分が大きく湾曲するものも少なくない。

刀鍛冶が中磨で使用する他は、包丁・鎌・鉈等の刃物をはじめ陶磁器の器面の仕上げや調整に使われ、日常品の調整や保守に使用される事が多い（汐見1999）中砥に用いられたものと考えられる。福島1996での「流紋岩製砥石」に対応する。

3類

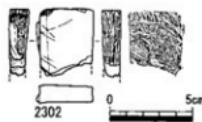
安山岩・砂岩を主な石材とし、基本的には方柱状を呈するもの。ただし、2類に比べて規格性が乏しいためか、形状・大きさにはばらつきがみられる。1267のように安山岩製で1類を模したような板状のものも含む。

中砥もしくは荒砥（註2）として使用されたと推測できるが、明確な根拠はない。

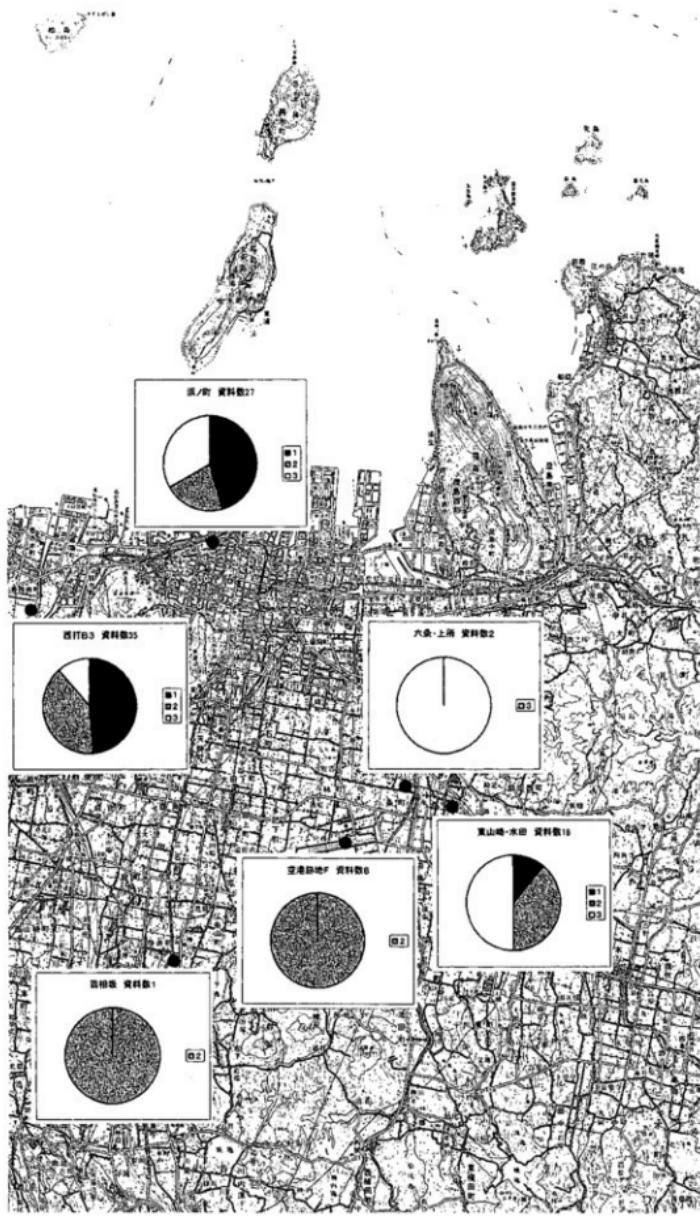
3. 1類砥石の流通

東山崎・水田遺跡からも少量出土しているが、浜ノ町遺跡と西打遺跡では出土砥石の半数近くを1類が占める（第254図）。

1類の石材である頁岩や緻密な凝灰岩は県内では産出しないため、搬入品であることは間違いない。さらに、特徴的な成形技法と規格製から京都産砥石である可能性は高い。平安京での分析によれば、京都産砥石は9～10世紀に出現、13世紀に普及し（田中2000）、ほぼ同時期に他地域にも流通すると思われるが、高松平野では限られた集落にのみ流通していたことがわかる。この砥石は、仕上げ砥であると推測できることから「一定量出土すれば、大工道具や日常生活に不可



第253図 漆による接合が認められる砥石



第254図 高松平野中世遺跡における砥石出土比率図

欠な小道具としての刃物が充実し、「種々の物を日々消費する状況が想定」できる（沙見 1999）とされている。しかし、浜ノ町遺跡からの出土資料（2302）、および草戸千軒町遺跡出土の頁岩製砥石の一部には、漆による破損部分の接合が認められ（註3）、同様の痕跡が2・3類にみられないことは、1類のみが補修を施されていたことを示している。接合された破損部分を見れば、破損したとしても砥石としての機能にはさほど影響がないと思われるため、板状の形態に固執していたためと考えられる。このことは、1類砥石が稀少品で、保持することに一定の意味があった可能性を示唆しており、1類砥石に機能的な側面以外の評価が必要であることを示している。

なお、浜ノ町遺跡出土の1329の石材である褐色の流紋をもつ流紋岩は県内では産出しない（註4）。さらに、結晶片岩製の砥石もみられることから、浜ノ町遺跡には様々な産地の砥石が流入していたことが指摘できよう。

註

- 1 1類の石材については、草戸千軒町遺跡出土砥石との肉眼観察による比較を行った。その結果、石材は数種類に分類できるものの、浜ノ町遺跡1類は、全て草戸千軒町遺跡での頁岩製砥石（福島 1996）と同石材であるとの結論を得た。
- 2 荒砥については、金属製品の初期研磨に多く用いられ（福島 1996）るものを指す。3類が福島 1999 での「砂岩製砥石」・沙見 1999 での「荒砥」含まれるのか否かについては判断できなかった。
- 3 この点については東松が確認した。
- 4 この点については谷山謙氏にご教示いただいた。また、現愛媛県砥部町付近で産出される「伊予砥」である可能性もある。

第3節 中世の土錘と漁業について

1. はじめに

浜ノ町遺跡では、中世の土錘が多量に出土している。ここでは、網漁に使用される土錘の分析を行うことで、浜ノ町遺跡における漁業の実態を明らかにしたい。

2. 漁業規模

土錘を装着する網（沈子網）の径の2乗値と網の抗張力は比例する。網の径は土錘の孔径・溝幅、網の抗張力は操業人数に置き換えることが可能であるため、土錘の孔径・溝幅の2乗値は操業人数に比することになる（真鍋1993）。そしてこの操業人数は、1度の網漁に投下される労働力を表していることから、その労働力を有する漁業集団の規模を示しているといえる。

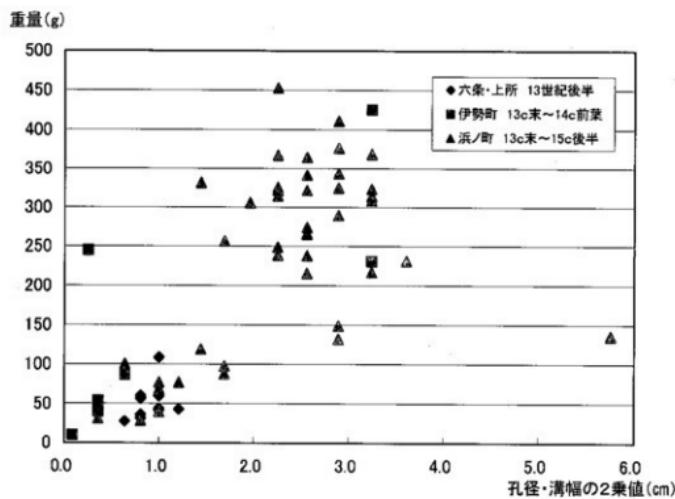
浜ノ町遺跡と六条・上所遺跡（高松市 北山1995）および伊勢町遺跡（宇多津町 米崎・乘松2003）出土土錘の孔径・溝幅と、重量について比較を行った（第12表）。その結果、浜ノ町遺跡、伊勢町遺跡と六条・上所遺跡の孔径・溝幅と重量には開きがあり、六条・上所遺跡に比べて、浜ノ町遺跡、伊勢町遺跡は大規模な漁業経営を行っていたことが判明した。

3. 生産地と消費地の関係

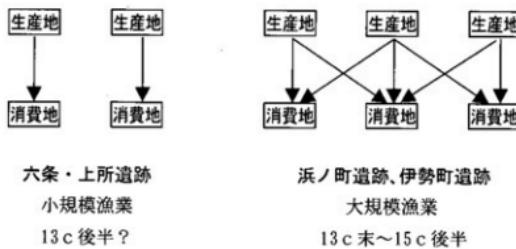
第3章第5節で述べたように、浜ノ町遺跡出土土錘には複数の生産地からの供給が想定される。六条・上所遺跡出土土錘44点はほぼ同様の胎土・焼成・形態を有し、單一生産地の可能性が高い。このことは、土錘の供給体制が遺跡によって異なることを示しており、浜ノ町遺跡に代表される大規模な漁業を営む集落は、土錘を複数生産地から入手しているといえる。また同一生産地のものと思われる有溝5類の土錘が伊勢町遺跡、積浦遺跡（直島町 佐藤2003）でも確認できることは、ひとつの生産地が複数生産地へ土錘を供給していたことによるものであろう。

4. 画期

以上、土錘の需要・供給関係の差異は、集落間の漁業規模の大小と関連性が認められ、さらに13世紀末を画期とする時期的な変化の側面を含んでいるとも考えられる。しかし、六条・上所遺跡出土土錘の帰属時期が不安定なため断定はできない。この問題については、将来的に13世紀～14世紀の良好な資料が得られた段階でさらに検討する必要があるだろう。



第12表 土錘孔径・溝幅—重量相関グラフ



第255図 土錘の生産地・消費地関係概念図

第4節 高松平野における井戸枠の変遷

1. はじめに

遺跡検出の井戸についての研究は、宇野 1982・岩本 1996 などに代表されるが、香川県内の中世・近世の井戸を対象とした研究は行われていない。近年、高松平野における中世・近世遺跡の発掘調査が増加し、資料が増加したことによって、井戸枠の時期的な変遷を捉えることが可能となつた。

本節では、高松平野の井戸枠の変遷を明らかにし、それぞれの画期とその背景について触れ、結物井側の導入時期から浜ノ町遺跡の特徴について述べようとするものである。

2. 井戸枠の分類

井戸の各部の名称は草戸千軒町遺跡（岩本 1996）に従う。井戸の分類は井側の構造と井筒の有無を中心に行うこととする。井側については、古代以来の主要構成材である木枠の有無を中心に分類を行い、詳細な類型を設定する際に井筒の有無を反映することとする。

1類

古代以来の井側である木枠をもつものである。木枠については更に詳細な分類が可能であるが、ここでは大枠として「木枠」としておく。

- 1 a 類 木枠+曲物（井筒）
- 1 b 類 石組+木枠+曲物（井筒）
- 1 c 類 石組+木枠

2類

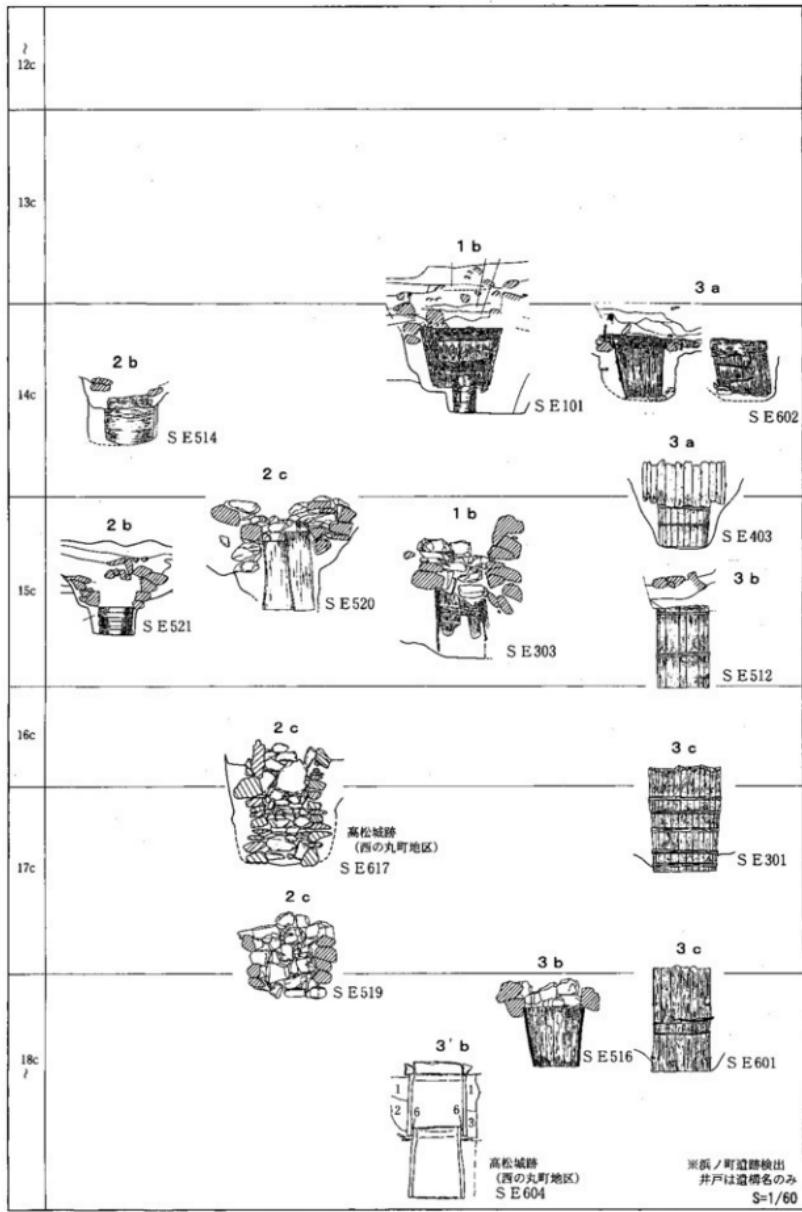
2類は木枠がないもの。ただし、井戸廃絶に際しては、井側は抜き取るのが通常であったと考えられるため、本来は1類であったものも含まれている可能性がある。

- 2 a 類 曲物（井筒）のみ
- 2 b 類 石組+曲物（井筒）
- 2 c 類 石組のみ

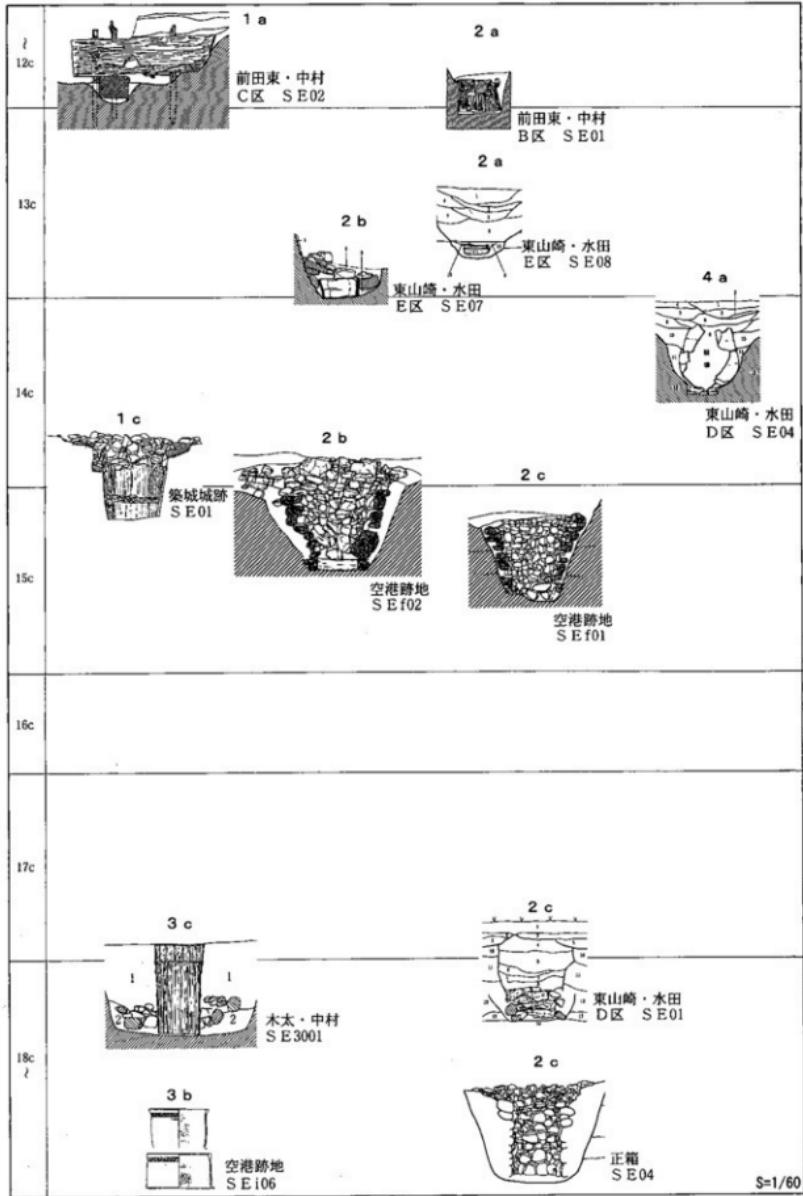
3類

結物を井側とするもの。

- 3 a 類 木枠+結物
- 3 b 類 石組+結物
- 3 c 類 結物+結物



第256図 浜ノ町遺跡、高松城跡井戸変遷図



第257図 高松平野井戸変遷図

3' 類

結物を模倣したと考えられる土師質土器を井側とするもの。口縁部には、明らかにたがを意識した網目状の文様が施されている。

3' a 類 土師質土器+結物

3' b 類 土師質土器+土師質土器

4 類

3' 類以外のやきものを使用（転用）した井側。

4 a 類 備前大甕

3. 井戸枠の変遷と画期

第 256・257 図には、共伴遺物を手がかりとした井戸枠の変遷を示した。井戸枠変遷の画期は以下のとおりである。

- ① 13世紀後半：石組井側の出現
- ② 14世紀前葉：結物井側（3類）の出現（浜ノ町遺跡のみ）
- ③ 15世紀中葉：曲物（井筒）の消滅
- ④ 15世紀中葉～後半：木枠井側（1類）の消滅
- ⑤ 17世紀後半：高松城下における結物井側の普及
- ⑥ 19世紀中葉：結物を模倣した土師質土器井側（3' 類）の出現

このうち特に重要なのは、結物井側に関連する ② 14世紀前葉に結物井側の受容が浜ノ町遺跡でのみ見られる、⑤結物井側が高松城下を中心に普及する、⑥結物模倣の土師質土器井側が出現し、城下・農村を問わず使用される 3つ画期である。

4. 結物の受容

2. で述べた画期②は、結物井側を早い段階での受容した浜ノ町遺跡の特徴を示すものである。中世の円筒形木製容器である桶・樽には、曲物・結物・剝物の3種類があり、古代以来曲物は中・小型容器として、剝物は大・中型容器として使用されていた。11世紀後半に中国からもたらされたとされる結物は、11世紀後半～12世紀に博多を中心とする中国人居留地で使用され、13～14世紀になって全国各地に波及し、剝物に替わってその役割を担った。その後、15～16世紀になると、結物製作技術の確立により、大・中・小型すべての寸法において結物の普及が進んだ（鈴木 2002）。遺跡で検出される井戸枠には、曲物・剝物・結物が用いられている例が多く、木製容器の使用状況を反映しているとすれば、高松平野では、浜ノ町集落が他集落に先駆けて容器としての結物を受容した可能性が高い。

また、全国的にみても結物受容の早い段階に属する浜ノ町遺跡 S E 602 については、上端部のたが

が、竹を編んだものではなく曲物が使用されている。これは、上端部のたがが破損した際、本集落では竹製のたがを編む技術（＝結物製作技術）を有しておらず、曲物という従来の技術によって補修されたものと考えられ、結物が搬入品であることを示す事例といえよう。

5. 近世における結物井側の使用状況

近世初頭段階、浜ノ町遺跡を含む高松城下でも結物井側が若干認められるが、主体は井側が石組みのみで構成される2c類である。結物井側は18世紀前半になって城下と一部の遺跡（木太・中村遺跡）で普及するが、農村部では認められない。19世紀中葉に結物模倣の3'類が出現すると、それまで結物を使用していなかった農村部でも石組のみ（2c類）・素掘りの井戸にとって変わるようになる。ここには結物井側に対する特別な意識を読み取ることができるのではないだろうか。

第5節 浜ノ町遺跡出土の石造物

1. はじめに

本遺跡では石造物として五輪塔の火輪 16 体、地輪 3 体、宝篋印塔の笠部 1 体、基礎部 1 体、層塔の屋根部 3 体の計 24 体が出土した。これら石造物は形態、材質において分類が可能であり、各々において時期差、地域差が想定される。ここでは本遺跡出土石造物の歴史的評価を検討したい。

2. 形態分類

火輪と地輪において分類できる。火輪は 5 類、地輪は 2 類に分類した。以下で基準を示す。

火輪

大型 K 1 高さ 30cm 以上、下幅 40cm 以上である。

ほぞ孔は上端部と下端部に認められる。軒は軒隅部でわずかに反る。他類に比較して軒の高さに対する総高の割合が大きい。

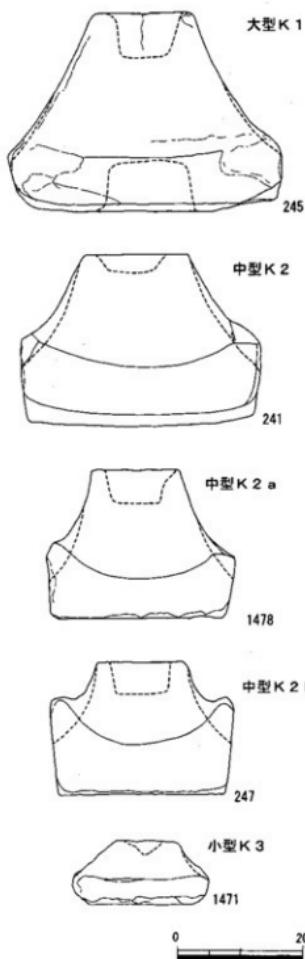
中型 K 2 高さ 20cm 以上 30cm 以下である。ほぞ孔は上端部のみに認められ、下端部は素面である。軒はゆるやかに両端に反る。反り具合は大型 K 1 類よりもつよい。

中型 K 3 a・K 3 b 高さ 20cm 以上 25cm 以下である。軒の反りではなく、下端は水平であるのに対して軒上辺は両端に向かって大きく反ることから、両端において軒幅は広い。ほぞ穴は上端のみに認められる。軒幅に対する総高の割合の大きいものを K 3 a、割合が小さく幅広い軒を有するものを K 3 b 類に細分する。

小型 K 4 高さ 20cm 以下である。軒の反りはなく、軒の上辺も小さな反りである。ほぞ孔は上端部のみに認められる。

地輪

T 1 下端面の掘りこみの浅いものである。幅に対する高さにおいてさらに細分可能であるがこれ



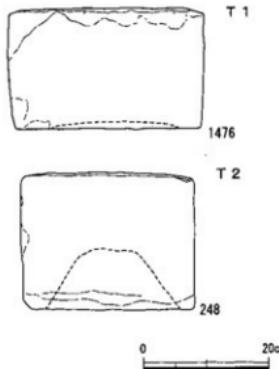
第258図 火輪分類図

こでは一括する。

T 2 下端面の掘りこみの深いものである。

3. 材質の分類

次に石材の材質の分類を行う。大文字アルファベット (A～C) は採石の想定される石切場を、アラビア数字 (1～2) は石切場内における岩相の違いを基準にした。



第 259 図 地輪分類図

A類

古墳時代に石棺として用いられた、いわゆる火山石である。採石地はさぬき市大川の西教寺奥の院等に確認することができる。岩相は白色シルトから砂を基質として、総面積の4割以上で構成される。そこに含まれる岩石類としては、粒径2から4 mm程度のざくろ石、粒径2から32 mm程度の黒色ガラスが特徴である。また、流紋岩、花崗岩、安山岩、玄武岩も微量に存在する。

B 1類

三豊郡三野町の弥谷寺周辺で採石が想定される。岩相は灰色シルトが微量に存在する集積岩で風化面は灰白から灰色を呈する。構成される岩石類において安山岩と思われる暗赤色の礫が特徴である。また、岩石類は安山岩、玄武岩がほとんどを占め、粒径1から4 mm程度の亜円礫である。

B 2類

構成される岩石類に関してはB 1類と同じであるが、岩石類の粒径が不均一なため別途分類した。粒径は5から7 mmの礫と2から4 mmの礫が多くを占め、大きいものでは100 mm程度の礫も含まれる。礫が角礫である点でB 1類とは区分される。

C類

小豆郡土庄町豊島で採石が想定される。通称「豊島石」と呼ばれている。岩相は灰色シルトが微量存在し、風化面は灰色から黄灰色を呈する。安山岩、玄武岩が多くを占め、粒径は均一で4から8 mmである。また、少量ではあるが、粒径4 mm程度の花崗岩を含み、弥谷・天霧山山系の凝灰岩との相違点として指摘できる。

4. 石造物の種類別（形態分類）における石材分類の対応

次に先に形態分類した火輪・地輪と層塔・宝鏡印塔部材に関して材質分類との対応を確認していく。材質におけるA類は、層塔部材3体、大型K 1類に対応し、B 1類は宝鏡印塔の笠部と基礎部、中型K 2類が対応し、B 2類は小型K 4類とT 1類が対応し、C類は中型K 3 a類・中型K 3 b類・T 2類が対応する。

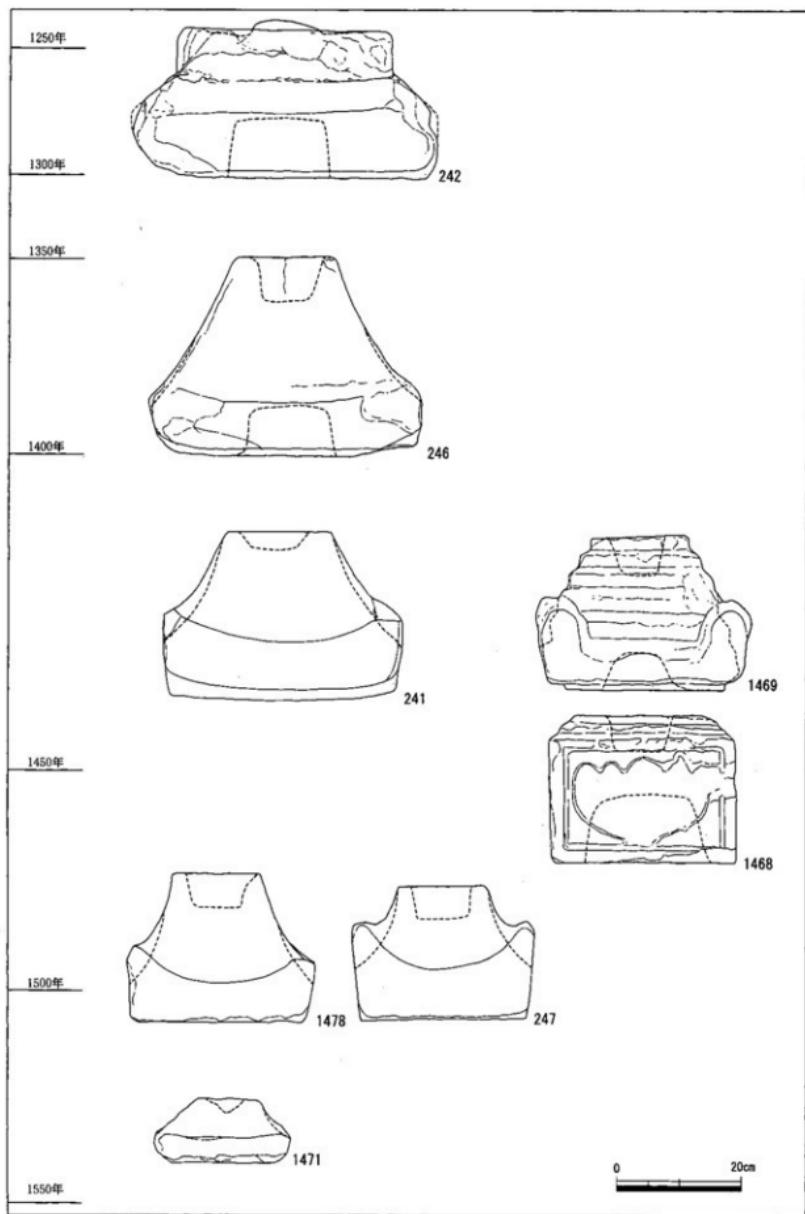
5. 時期的変遷と材質の変遷

以上で明らかとなった石造物種と材質分類においてその時期的変遷を検討する。まず、3体の層塔部材は、県内で現存するA類の層塔において紀年銘を有するものがないために形態の比較はできない。ただ、B1類の層塔や花崗岩層塔において年号が確認され、おおよそ13世紀後葉から14世紀初頭が看取される（坂出市白峰寺十三重塔=1278・1324年・丸亀市和泉屋敷層塔=1311年）。当遺跡出土の層塔の保存状態は良好とはいえないが、法量、軒幅からはおおよそ同時期が想定される。なお、類例資料は志度寺海女墓前五重塔（さぬき市志度）、大山神社外縁多層塔残（さぬき市津田）、馬篠観音堂五重塔（東かがわ市馬篠）がある。

A類の五輪塔において大型例にはさぬき市大川の長福寺跡五輪塔（総高58cm）、三木町鎌倉塚（総高40cm）があり13・14世紀代の造立が推測される。また、さぬき市志度の海女の墓五輪塔群では多くが総高40cmから50cmを呈しており、「志度寺縁起絵」に描かれた石塔群と同一のものとするならば、縁起絵の製作時期から13・14世紀代が推測される。さらに五輪塔以外の笠部も参考にするならばさぬき市大川の笠塔婆（総高45cm）がある。このように13・14世紀の代表的な笠部（火輪）の法量からすれば大型K1類の法量はやや小さいことが指摘できる。一方、さぬき市長尾極楽寺墓地にはA類の五輪塔が数基確認されるが、その中で歴代住職である隆珍と珍光は地輪にその名が刻されている。隆珍は1421年、珍光は1450年に没したことが文献から明らかであるため、両五輪塔は紀年銘資料として用いることができる。隆珍の五輪塔は軒幅に対して総高の割合が大きく、軒反を指摘できる。総高は39cmを測り大型K1類に近似している。一方、珍光の五輪塔は軒幅が大きくなり、軒反も消滅している。総高は34cmで比較的近似しているものの、形態的には大型K1類とは大きく異なっている。以上、A類五輪塔の検討から形態と法量の縮小化を考慮すれば、大型K1類の製作時期はおおよそ14世紀中頃以降から15世紀初頭が推測される。

中型K2類は軒反が認められること、法量が大型A1類よりもさらに縮小していることから大型K1類に後続するものとして推測される。B1類の五輪塔火輪において13・14世紀の推測されるものに、多度津町伝飯尾時蔭墓（総高46cm）、善通寺市善通寺三帝石塔五輪塔（総高38cm）があるが、中型K2よりも大型である。法量の縮小化を考慮すれば中型K2類は13・14世紀に後続する15世紀段階が製作時期として想定される。また、B1類は五輪塔火輪の他に宝篋印塔の笠部と基礎があるが、基礎部の正面と背面に施されている格狭間は室町期の特徴を有しており、善通寺三帝石塔宝篋印塔が鎌倉・南北町期の特徴をもつことから、後者から前者への変遷が看守される。一方、製作時期の下限は軒反が認められる点からおおよそ15世紀中頃が推測される。以上から、五輪塔火輪中型K2類と宝篋印塔の笠・基礎部の製作時期は15世紀初頭から中頃までが想定される。

中型K3a・K3b類は軒反が消えるものの、法量において中型K2類と類似することから、中型K2類に後続する段階、15世紀中頃以降が推測される。また、C類の石造物の紀年銘資料として高松市神内家墓地五輪塔（1466年）、土庄町家浦八幡神社鳥居（1474年）、さぬき市長尾極楽寺円瑜五輪塔（1497年）が初期の事例であり、その他、年号の確認できないC類においても軒反や大型の事例は認められないことから、C類の使用開始は15世紀中頃以降が想定される。なお、形態か



第260図 石造物変遷図

らは中型K 3 A類と中型K 3 B類に分類されるが、両者の時期的な関係は明らかでない。

小型K 4類・T 1類は法量の小型化と形態の簡素化が目立つ。石材においてB 2類は紀年銘資料として琴平町金毘羅宮別当宥巣五輪塔（1600年）や宥盛五輪塔（1613年）があり、特に100mm程度の礎を含むものには生駒藩生駒家五輪塔群、碑殿型五輪塔等17世紀代のものが多い。小型K 4類・T 1類は石材において17世紀代の近世五輪塔に引き継がれるものであり、よって、製作時期はその前段階、16世紀段階が想定される。また、前段階である中型K 3 a・K 3 b類からはさらなる法量の小型化として理解でき、小型K 4類に1体C類が含まれていることからC類からB 2類への石材変遷が推測される。以上の検討からは第260図のような石材・形態変遷が想定される。

6. 各石材の分布からみた石材変遷の位置づけ

上記では石材変遷としてA類→B 1類→C類→B 2類を指摘した。

さぬき市大川町で採石されるA類における石造物の分布は引田町から三木町までの県東部であり、浜ノ町遺跡の位置する高松北部には確認できない。ただ、高松北部には13・14世紀代の石造物は確認されておらず、もともと当期の石造物が当地域に存在しなかったのか、後世、例えば城下町の形成時もしくは近代以降における市内発展の中で廃棄・埋没されたのかはわからないが、今回出土したA類は高松北部に認められる唯一の14世紀代の資料であり貴重である。それゆえ当地域にA類の面的な分布が今後の調査によって明らかになる可能性はあるが、高松南部にA類の分布しないことからは、やはり、高松北部はA類の分布域ではないものと推測する。A類は県内において点的な分布として国分寺町国分尼寺や坂出市白峰寺等に認められることから、当例も点的な分布の一例として理解する。なお、今回の資料ではA類の層塔が出土した。A類の分布域においても層塔は少なく、県内においても13・14世紀の事例が多く、総数は決して多くはなく貴重な資料である。

三野町弥谷寺周辺で採石されるB 1類における石造物の分布は高松市から豊浜町までの県西部であり、15世紀以降は高松北部においても確認される。従って、面的な分布域内である。

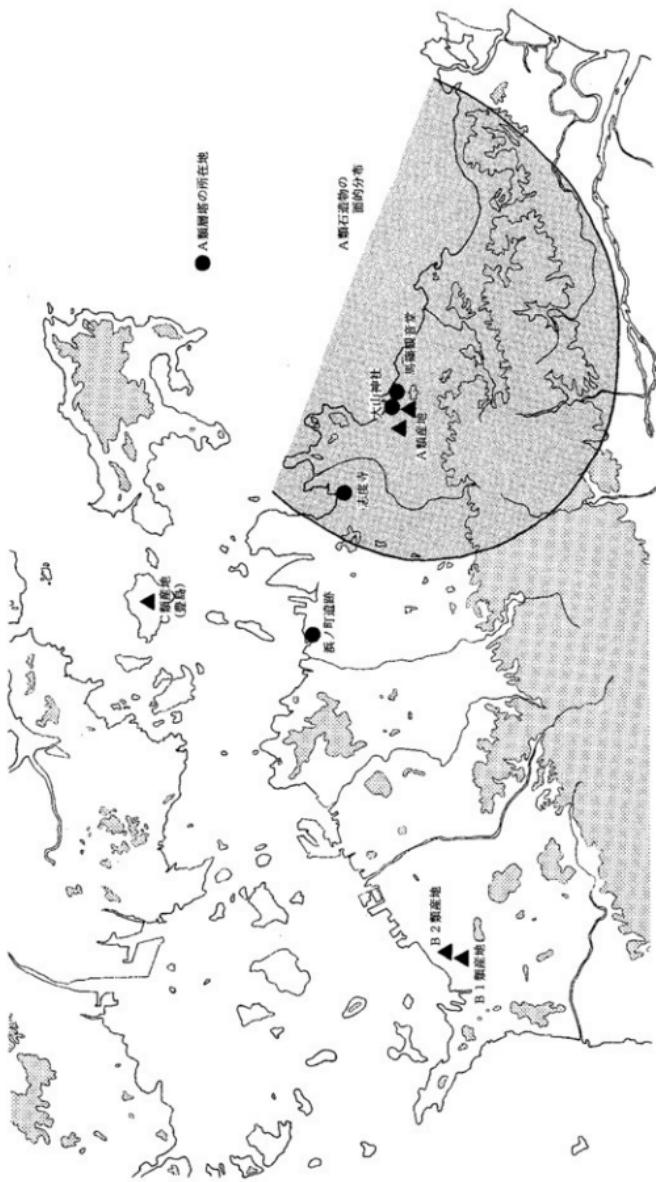
土庄町豊島で採石されるC類における石造物の分布は高松市香西地域に面的な分布が確認される。また、さぬき市長尾・神前、国分寺町に散見され、石造物の少ない高松市東部には少数ではあるがC類が主体的に確認される。前述したとおり、15世紀中頃以降に造立が認められ始めるところから、当遺跡におけるB 1類からC類の変遷と時期的に合致する。また、分布域においてもおよそ面的な分布域内おさまるものと思われる。

三野町弥谷寺・善通寺市碑殿周辺で採石されるB 2類における石造物の分布は高松市から豊浜町までの県西部であり、当遺跡は面的な分布域内にはいる。

7. 浜ノ町遺跡出土石造物の歴史的位置付け

これまでの検討から浜ノ町遺跡出土の石造物は製作時期として13・14世紀から16世紀が想定される。また、その採石地はさぬき市大川町火山周辺→三野町弥谷寺周辺→土庄町豊島→三野町弥

第261図 石造物石材产地とA類層塔の分布



谷寺・善通寺市碑殿周辺であり、火山のみが面的な分布域からはずれている。

火山の石造物が面的な分布域からはずれる要因として、一つに高松城下町形成における石垣等の石材調達のため 17 世紀前後に県東部から運送された可能性が推測される。しかし、そうであるならば 15・16 世紀段階の火山産や 13・14 世紀の弥谷寺産があつてしかるべきである。今回の検討では石材の変遷が石造物の変遷と関わりあいながらスムーズに変遷していることから、アトランダムに県内各地から集められたのではなく、比較的近い場所からの移動が推測される。想定されることとして当遺跡の周辺に中世墓地のあった可能性を想定したい。

浜ノ町遺跡出土石造物は、まず層塔が造立され、続いて五輪塔（宝篋印塔）が連綿と造立されていった。おそらく層塔は想定される中世墓地内に最初に造立され、後々のシンボル的存在となった總供養塔であったと思われる。

最後に浜ノ町出土石造物の供養対象者像にせまりたい。中世における墓への石造物の造立は一般庶民に普遍的に及んでいたとは考えられない。県内で伝承されている石造物群も多くの有力者層もしくは寺院関係者である。前者には三野町弥谷寺にある香川氏墓や満濃町佐岡の長尾氏墓、後者にはさぬき市長尾極楽寺歴代住職墓などがある。その中で高松市神内氏墓では 13・14 世紀から 16 世紀までの連綿とした一族墓の形成が想定され、造立期間等では浜ノ町遺跡出土石造物と類似している。従って、当石造物も一族墓もしくは歴代住職墓であった可能性がたかい。西浜町付近には岡田氏の西浜城があったといわれており、その所在地は明確ではないものの浜ノ町遺跡から比較的近い場所にあったものと思われる。浜ノ町遺跡出土石造物を一族墓として考えるならば、岡田氏がその候補として推測される。

第6節 中世の浜ノ町遺跡について

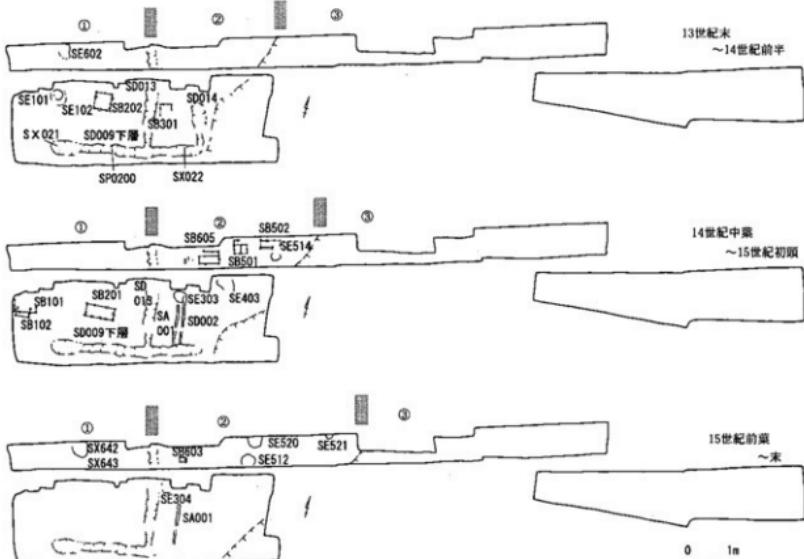
1. 遺構の変遷（第262図）

ここでは、中世の遺構変遷（第262図）について述べるが、第3章第3節で述べたように、本遺跡での掘立柱建物の認定については疑わしいため、居住域の想定や拡がりは、井戸をもって想定することとする。限りなく海岸線に近い位置にある本遺跡では、平野内陸部の集落と異なり、日常生活に必要な水を河川や水路から供給されることはないと想定するため、井戸が日常生活に直結する遺構であると考えられ、居住域を推定する根拠となると思われるためである。

13世紀末～14世紀前半

浜ノ町遺跡に本格的に集落が展開し始める時期。この時期は、13世紀前半までに形成された居館・小集落・交易拠点の3者が一定の時期幅をもちつつも相前後して廃絶・移転する、高松平野全体に共通した大きな画期（佐藤編2000）とされており、浜ノ町遺跡集落の出現も高松平野全体の遺跡動向と連動していることは疑いない。

この段階ではSD009上層・013・014の区画溝を有し、SD009上層に開まれた①部分が居住域と考えられ、②部分は基本的には日常的には利用されていなかったと考える。SD009上層の東端部が、トイレ遺構（SX021）として利用されていることも、①部分が居住域であったことを裏付けるものである。ただし、使用痕のある杯が多量に出土した遺構SX022の存在から、SD013・014問についても、限定的に使用されていた可能性もある。



第262図 中世遺構変遷図

地域		浜ノ町遺跡			西打B3 区SX08	東山崎・ 水田E区 SD04	百相坂 SX08	空港跡地 SD1002
		SX401	SX642	SX401+ SX642				
在地	土師質土器	小皿	4	116	120	3	33	23
		杯	489	1520	2009	239	55	113
		椀	1	1	2		1	1
		甕	1	1	2		4	4
		鉢	3	4	7	3	5	25
		鍋	8	17	25	13	14	46
		把手付鍋			0	1		7
		足釜	74	117	191	125	43	55
		羽釜	3	4	7			311
		計	583	1779	2362	384	119	374
		小皿		2	2			
在地	十瓶山窯系	杯	1	2	3		6	
		椀	2	27	29	3	17	16
		甕	8	6	14	5	1	13
		鉢	1	2	3		1	3
		黒色土器椀		0			2	
		計	12	39	51	8	19	25
		糠井窯系	鉢	1	6	7	9	1
		鍋		1	1			
		在地産瓦質土器	茶釜		1	1		
		計	0	2	2	0	0	0
		在地	計	596	1826	2422	401	139
			83.83%	85.41%	85.01%	95.70%	92.67%	99.25%
								92.64%
吉備	吉備系	椀		3	3			
		鍋	1	1	2			
		計	1	4	5	0	0	0
		鉢		2	2			
		甕	2	3	5		1	2
		計	2	5	7	0	1	0
		大甕		18	18	1		9
		鉢	9	18	27	2		5
		壺	2	15	17	1	2	3
		不明	35	228	263	13	7	19
		計	46	279	325	17	9	36
		吉備	計	49	288	337	17	10
			6.89%	13.47%	11.83%	4.06%	6.67%	0.00%
播磨	東播系須恵器	鉢	2	8	10		1	1
		計	2	8	10	0	1	0
		播磨	0.28%	0.37%	0.35%	0.00%	0.67%	0.00%
畿内	瓦器	椀		0			1	
		皿	3		3			
		計	3	0	3	0	0	1
		京都系土器	皿	54	1	55		
		甕		2	2			
		瓦質土器	火鉢		1	1		
		風炉		1				
		計	1	3	4	0	0	0
		畿内	計	58	4	62	0	0
			8.16%	0.15%	2.18%	0.00%	0.00%	0.00%
東海	常滑	甕		3	3			
		鉢	2		2			1
		水注		1	1			
		計	2	1	3	0	0	1
		東海	計	2	4	6	0	0
肥前	滑石製	.	0.28%	0.19%	0.21%	0.00%	0.00%	0.00%
		石鍋		2	2			
		肥前	0	2	2	0	0	0
中国	青磁	鉢	0.00%	0.09%	0.07%	0.00%	0.00%	0.00%
		碗		3	2	5	1	2
		杯		2	2		1	
		鉢・皿	1	2	3			4
		計	1	4	5	0	1	4
		中国	計	4	6	10	1	3
			0.56%	0.28%	0.35%	0.24%	0.00%	0.75%
		總計	711	2138	2849	419	150	402
								639

第13表 高松平野中世遺跡出土土器組成表

14世紀後半～15世紀初頭

S D 014が埋め戻され、②部分にも居住域が展開する。この段階でも①・②間を区画する S D 013は継続し、並行する柵列 S A 001も築かれる。こういった状況から、①・②の居住域は単位を異にすると考えた方がいいだろう。また低地である③部分もある程度整地が行われる。低地部分から多量に中世瓦が出土しているのは、整地の際の廃棄によるものと考えられるが、それを除いても①部分に比べて②部分から瓦が多く出土していることは、②部分に寺院があった可能性を想定させるものである（第3章第6節）。

15世紀前葉～末

①部分には廃棄遺構と考えられる S X 642・643があるものの、井戸は見られず、その他の遺構についても15世紀初頭以前に比べて減少するため、居住域の中心は②部分に移る。③部分の整地により、②部分の面積が拡がっているのは、そのためであろう。

その後、15世紀末（16世紀初頭？）に浜ノ町遺跡集落は廃絶し、16世紀には続かない。戦国期末にまで集落が継続しない高松平野の一般的な現象（佐藤編2000）と傾向を同じくし、平野全体の社会変動と密接な関連が推測できる。

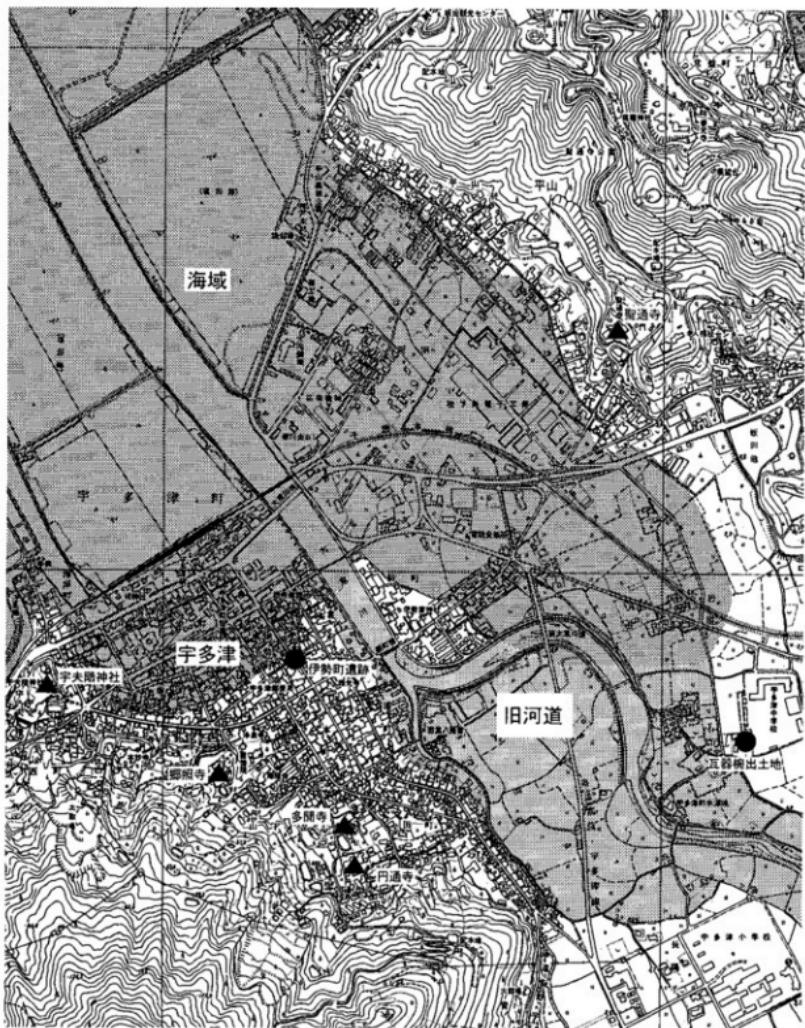
2. 浜ノ町集落の経営基盤

約200年間継続する浜ノ町集落は、海浜部の砂堆上に立地するという集落の特性から、内陸部の集落で從来想定されているような農業経営との関わりは当然考えられないため、他の側面から集落の経営基盤について検討する。

結物井側（第4節）や京都産と想定される1類砥石（第2節）は、高松平野では浜ノ町遺跡と一部の遺跡でしか確認できない。近畿地方で17世紀中葉以降に普及する青緑色系チャート製の火打石も浜ノ町集落で認められ（註）、高松平野の同時期の遺跡に比べて土器・陶磁器の搬入品も多い（第13表）。これら様々な物資が搬入されている状況から、旧香東川下流域に位置する浜ノ町集落は、瀬戸内海を介して高松平野と平野内陸部を結ぶ、物資の流通拠点であると考えられる。その機能は、11世紀前半～13世紀前半には、港湾施設関連遺構が検出された高松城跡（西の丸町地区）が担っており（佐藤編2003・松本編2003）、高松城跡（西の丸町地区）が衰退する13世紀末以後に、約400m西に位置する浜ノ町集落が受け継いだものと考えられる。浜ノ町遺跡では港に関連する遺構は存在しないが、上述のように多様な搬入品が見られること、また、港が想定される位置にあるA類（火山石）層塔（第5節 第261図）の存在は、間接的ではあるが、浜ノ町集落の近隣に港があったことを示すものであろう。

なお、浜ノ町集落に搬入される土器・陶磁器には、同時期の高松平野内陸部の遺跡に比べて、特に近畿地方や岡山県を生産地とするものが多く認められ（第13表）、土器・陶磁器組成から見れば、浜ノ町集落の主要な交易先は近畿地方と岡山県であったことが窺える。中国産磁器や古瀬戸などは、近畿地方を介して入手していたと考えられ、土器・陶磁器以外の物資も同様に主として近畿地方から搬入されていた姿が想定できる。

その一方、浜ノ町遺跡集落は大規模な漁業を展開し（第3節）、物資流通と併せて重要な集落経営の基盤となっていたと思われる。丸亀平野を流れる大東川河口に位置する伊勢町遺跡でも同様の可能性は指摘されており（米崎・乗松 2003）、海浜部に立地する集落が、物資流通と漁業を集落の経営基盤としていたのは、それぞれの地域にみられる普遍的な姿であったと思われる。こういった状況は、現在のところ13世紀以前には認められないため、13世紀末以降に居館・小集落・

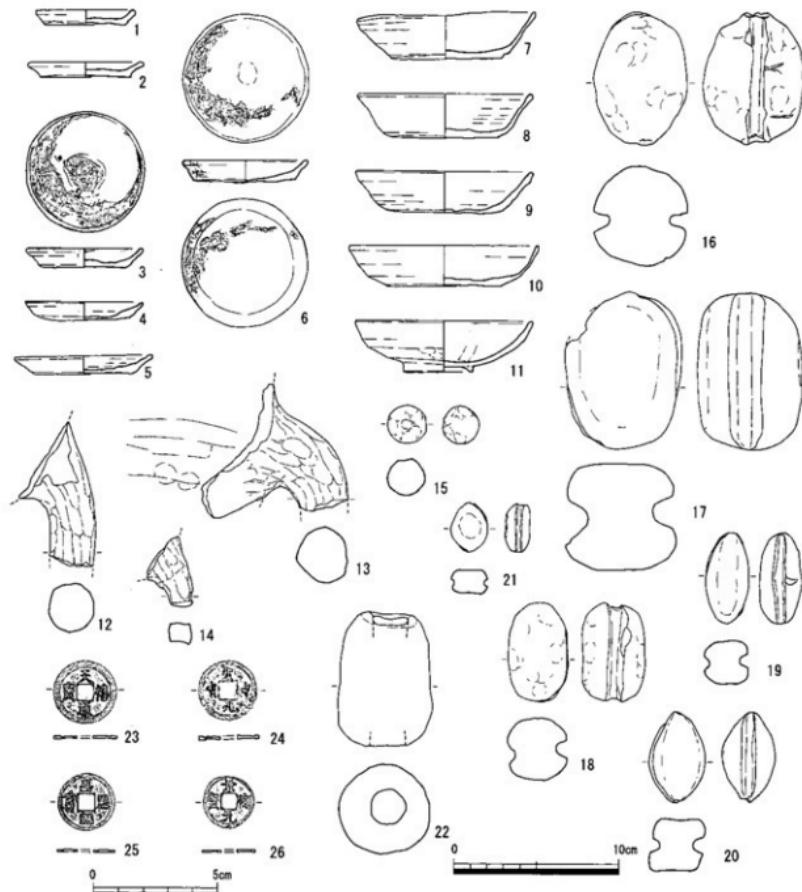


第263図 伊勢町遺跡位置図(S=1/10,000)

交易拠点の3者が一定の時期幅で大きく変動する（佐藤編 2000）なかで出現するものと考えられる。

また、遺構は確認できないが、軒瓦を含む中世瓦や、瓦質土器仏花瓶（1661）は、大規模ではないものの寺院の存在を想定させる。集落の強い経済的な背景をもとに、寺院経営も行っていた可能性がある。

註 確実に中世にまで遡るチャート製火打石は、香川県内では、浜ノ町遺跡のほか海浜部に近いさぬき市花池尻北遺跡（小野 2000）で認められる。その他の遺跡では、サスカイト製火打石が主流を占める。



第264図 伊勢町遺跡出土遺物実測図

第7節 近世の遺構変遷と土地利用

16世紀末～17世紀初頭

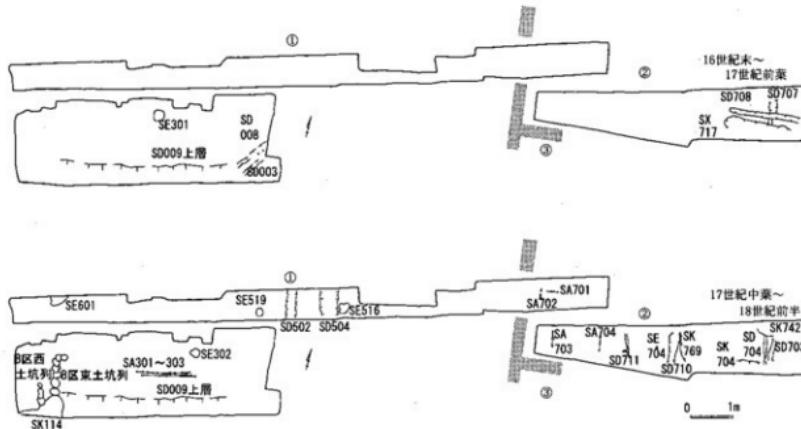
高松城築城期である。遺跡西半部（①部分）では、中世段階のSD 009下層とほぼ同位置にSD 009上層が掘削されるが、その主軸方向もSD 009下層とほぼ同様で、中世以来の地割が踏襲されているようである。

この時期の絵図は存在しないため、具体的な土地利用は不明である。しかし、①部分では中世段階の地割が踏襲されていること、②部分では①部分に比べて明らかにレベルが低いことから、この時期には城下としての未整備であったと思われる。ただし、②部分は17世紀前葉頃にSX 717が埋め戻されるなど、大規模な整地（Ⅱ層）が行われる。

17世紀中葉

①部分ではSD 003・008が埋め戻され、替わってSD 009下層と直交する方向のSD 502・504が掘削され、地割の整備が行われたことがわかる。②部分についても、少数ではあるものの、17世紀前葉の整地層上面に遺構が見られる。

第2章第2節で述べたように、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（推定製作年代1648～49年）では②部分の東端にのみ「船頭」と記された屋敷地が描かれ、それ以外には屋敷地の表現が認められない。なお、調査地外の③部分は「西浜船入」に関連する人物の屋敷地である。『高松城下図屏風』（推定製作年代1650年代前半）では、②部分が整然とした屋敷地であるのに対して、①部分は海岸線に沿った地割に「小屋」状の小さな建物が密集する前時代的な様子が描かれている。ただし、



第265図 近世主要遺構変遷図

S D 003・008 のような斜め方向の地割は認められない。

検出遺構と絵図を併せて考慮すれば、この時期に①部分が整備され、②部分は「城下」としてではなく、「居住域」として地割の整理が行われることを示している。

17世紀後半～18世紀前半

①部分には18世紀前半埋没の遺構が多数見られるが、ほとんどが廃棄土坑である。特に、B区の南北方向の土坑列は屋敷地間の境界を示している可能性もある。②部分にも少数はあるものの、この時期の遺構が見られる。調査地全体でも、18世紀後半に降る可能性を含むI区SK742を除いて、この時期以降の遺構は近代になるまで認められない。

『高松城下図』（推定製作年代1716～36年）では、①部分は屋敷地として描かれ、②部分は「御船蔵」として描かれている。『元文5申年6月讃岐国高松地図』（推定製作1740年）とこれ以降の絵図では、①部分と②部分の一部が「畠」「畠」「御用地」とされ、『小神野夜話』には、御家人の減少と北からの波風のため付近一帯から武家屋敷が移転したことが記されている。

①部分に多く見られる18世紀前半の廃棄土坑は、屋敷地廃絶に伴うもので、翻って17世紀後半以後に整備された屋敷地の存在を推測させるものである。また、②部分に遺構がさほどみられないのは、1767年以降に船蔵として利用されていたためであると思われる。

引用・参考文献

- 安藤文良 1967『讃岐古瓦図録』『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会
- 岩本正二 1996『井戸』『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V－中世瀬戸内の集落遺跡－』広島県教育委員会
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1982『井戸考』『史林』第65巻第5号 史学研究会
- 江浦 洋編 1995『日置莊遺跡 近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書』大阪府教育委員会ほか
- 大久保徹也 2001『塩飽諸島の海浜部遺跡踏査の成果』『徳島文理大学文学部共同研究 塩飽諸島』徳島文理大学文学部文化財学科
- 尾上 実 1983『南河内の瓦器焼』『古文化論叢』藤澤一先生古希記念論集刊行会
- 小野秀幸 2000『花池尻北遺跡』『平11年度県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報』香川県教育委員会ほか
- 片桐孝浩 1992「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』香川県教育委員会ほか
- 北山健一郎 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 六条・上所遺跡』香川県教育委員会ほか
- 木戸雅寿 1993『石鍋の生産と流通』『中世土器の基礎研究』IX 日本中世土器研究会
- 木下晴一編 2001『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 西打遺跡I』香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬編 2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬 2003『積浦遺跡』『県道関係埋蔵文化財発掘調査報告 村黒遺跡・積浦遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬編 2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）』香川県教育委員会ほか
- 汐見一夫 1999『砥石について－中世遺跡出土の仕上げ砥を中心に－』『第12回北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の石文化I』 北陸中世考古学研究会
- 勘柄俊夫 1999『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社
- 鈴木康之 1996『土器類』『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V－中世瀬戸内の集落遺跡－』広島県教育委員会
- 鈴木康之 2002『日本中世における桶・樽の展開－結物の出現と扩散を中心に－』『考古学研究』第48巻第4号 考古学研究会
- 高橋 学 1996『高松平野の地形環境－弘福寺領山田郡田園比定地付近の微地形環境を中心に－』『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讀鏡国田園調査報告書』高松市教育委員会
- 田中 学 2000『遺物からみた中心地機能論－砥石を中心に－』『月刊考古学ジャーナル』No.478 （株）ニュー・サイエンス社
- 西岡達哉 1996『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡I』香川県教育委員会ほか
- 乗岡 実 1999『中近世の備前焼鋤鉢の編年案』『第11回関西考古学研究会大会レジメ』
- 乗岡 実 2002『近世備前焼鋤鉢の編年案』『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会
- 乗松真也編 2001『平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』浜ノ町遺跡 高松城跡（西の丸町地区） 西打遺跡』香川県教育委員会ほか
- 乗松真也 2002『平成13年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか
- 乗松真也 2003『香川・浜ノ町遺跡』『木簡研究』第25号 木簡学会
- 福島政文 1996『砥石の流通と用途』『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V－中世瀬戸内の集落遺跡－』広島県教育委員会
- 藤澤良祐 1982『古瀬戸中期様式の成立過程』『東洋陶磁』第18号 東洋陶磁学会
- 藤澤良祐 1995『瀬戸古窯址群III－古瀬戸前期様式の編年－』『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- 古野徳久編 2001『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 高松城跡（西の丸町地区）』香川県教育委員会ほか
- 古野徳久・乗松真也編 2000『平成11年度サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』高松城跡（西の丸町地区）』香川県教育委員会ほか

- の丸町地区）浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか
- 松本和彦・佐藤竜馬 2001「高松城出土土器・陶磁器の変遷 様相の把握」『第3回四国徳島城下町研究会 四国と周辺の土器－焰焼の生産と流通－』四国徳島城下町研究会
- 松本和彦編 2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会ほか
- 松本和彦 2003『高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）』香川県教育委員会ほか
- 真鍋篤行 1993「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書（II）』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 森下友子 1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要IV』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 森田 稔 1986「東播系須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』3 神戸市立博物館
- 山下平重・信里芳紀編 2002『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 西打遺跡II』香川県教育委員会ほか
- 山本悦世 1992「吉備地域南部における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
- 米崎 旭・乘松真也 2003「宇多津町伊勢町遺跡について」『香川史学』30号 香川史学会

図版 1



A区調査前風景 東から



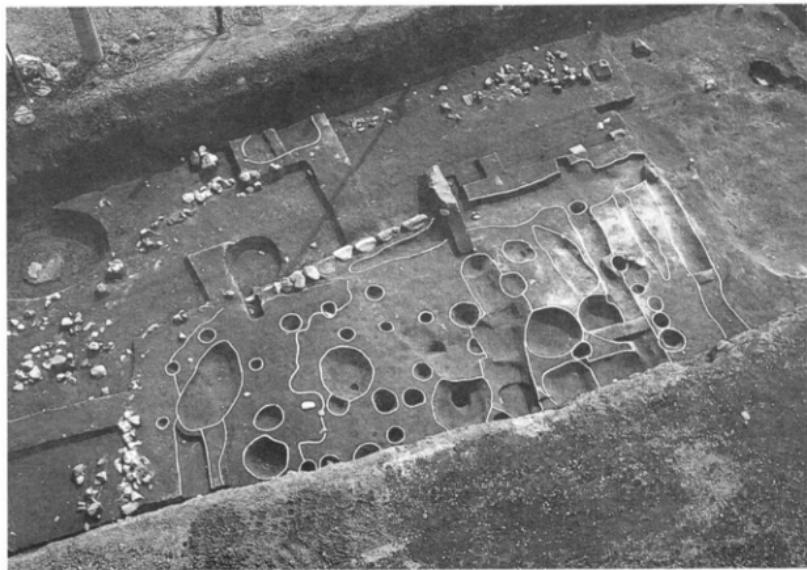
A区 0.6 m全景 東から



SD 003・008 検出状況 北東から



SX 405 A区部分検出状況 南東から



A区区画部完掘状況 北から



S X 001 検出状況 南東から



S X 004 検出状況 南東から



SD 009 下層 S X 022 遺物出土状況 東から



SD 009 下層 S X 022 遺物出土状況 北東から



S X 022 調査風景



SK 114 石列検出状況 南から

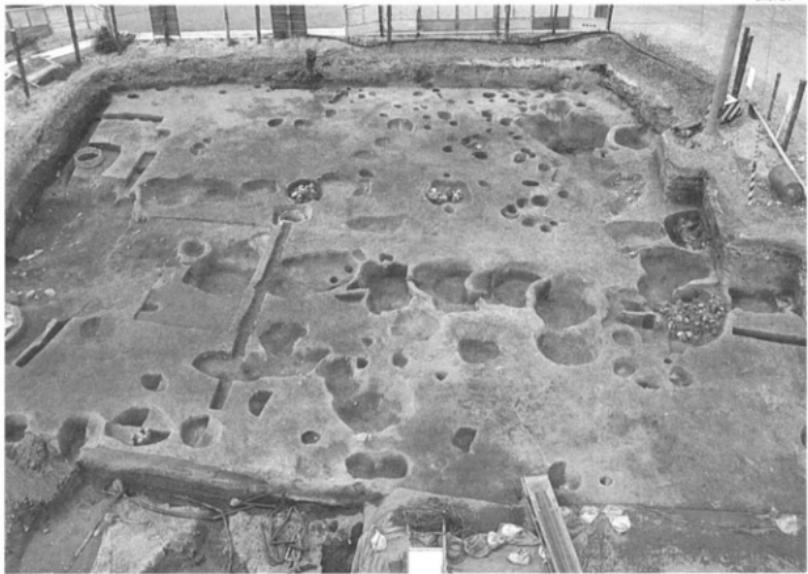


SK 135 配石? 検出状況 南から



SD 009 B 区部分完掘状況 南から

図版 3



B 区 0.9m 全景 東から



B 区 0.7m 全景 南西から



S K 165 検出状況 南西から



S K 165 調査風景 北東から



S E 101 調査風景 南西から



S E 101 井戸枠検出状況 北から



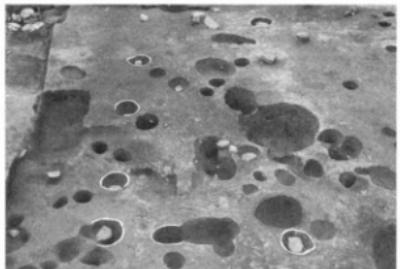
S E 101 井戸枠検出状況 南から



S E 102 井戸枠検出状況 東から



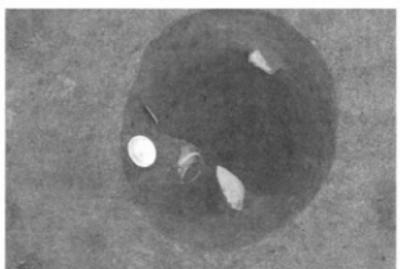
B・C区全景 北東から



S B 201 完掘状況 東から



S K 212 遺物出土状況 東から



S P 2068 遺物出土状況 東から



S A 001 e - e' 土層断面 北西から



D 区全景 北から



S E 303 井戸枠検出状況 北から



S E 303 井戸枠断面見通し 南から



S E 304 井戸枠検出状況 南から



S E 304 遺物出土状況 南から



S D 013・014 D区部分完掘状況 南から



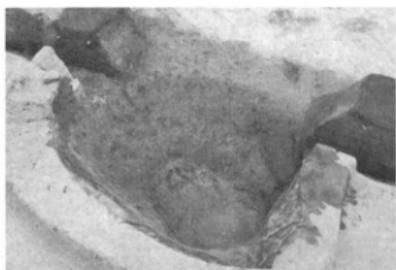
S D 013 D区部分完掘状況 南から



S D 014 D区部分完掘状況 南西から



S D 008 E区部分完掘状況 南東から



S K 414 完掘状況 南から



E区全景（上位） 北東から



E区全景（下位） 北東から



S E 403 井戸枠（下部）検出状況 南から



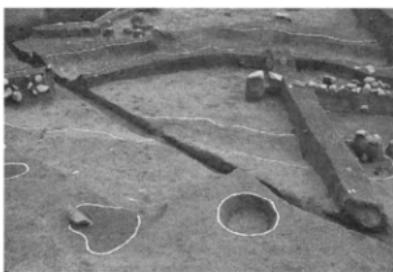
S E 403 遺物出土状況 南から



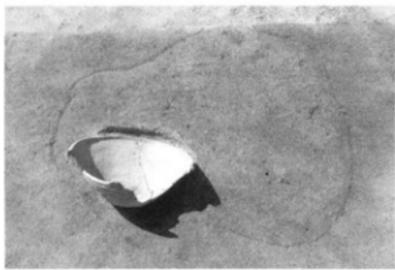
S X 401 検出状況 南西から



S X 405 E 区部分検出状況 南西から



S X 416 完掘状況 北西から



S K 407 遺物出土状況 北から



S X 407 遺物出土状況 南から



S D 502・504 完掘状況 南から



S X 542 崩落石検出状況 西から



S X 542 調査風景



S X 542 断面 南から



S X 542 検出状況 南西から



S X 542 検出状況 西から



S E 512 井戸枠検出状況 北から



S E 514 井戸枠検出状況 西から



S E 516 井戸枠検出状況 南西から



S E 519 井戸枠断面見通し 東から



S E 520 井戸枠断面見通し 南から



S E 520 呪符木簡出土状況 南東から



S E 521 井戸枠断面見通し 南から



S K 521 底板検出状況 南から



S X 530・531 遺物出土状況 南から



S X 531 遺物出土状況 南東から



S X 531 土錐出土状況 南東から

図版 17



H区全景 西から



S E 601・602 井戸枠検出状況 南西から



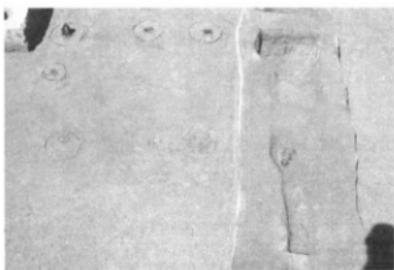
S X 642 集石検出状況 南東から



S E 602 井戸枠上部検出状況 東から



S E 602 井戸枠（下部）検出 南西から



S B 603・S A 001 柱材検出状況 南から



S P 6011・S K 661 遺物出土状況 南東から



S K 661 遺物出土状況 南東から



周辺風景（2002年1月） 西から



I 区全景 東から



SK 742 石積み検出状況 北から



S X 717 遺物出土状況 西から



S X 717 西端部遺物出土状況 南東から



S X 717 遺物出土状況 南東から



S X 717 遺物出土状況 北から



S D 708 集石検出状況 北東から



S A 701 検出状況 南東から



S A 702 検出状況 北西から



S A 703 検出状況 西から



発掘調査参加者



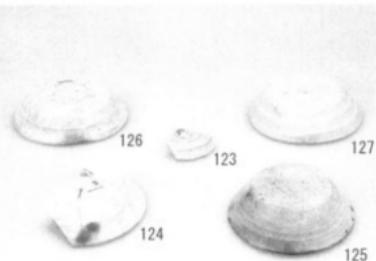
発掘調査参加者



79



109



126

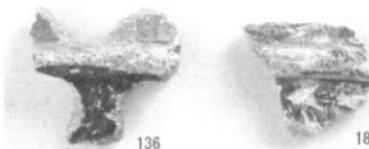
123

127

124

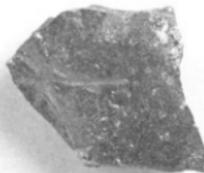


125



136

182



169



181



211



294

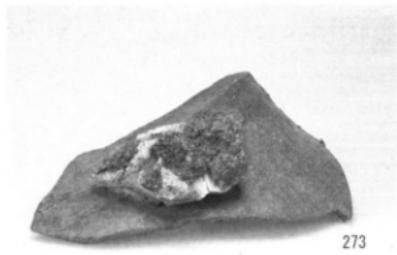
270



255



268



273



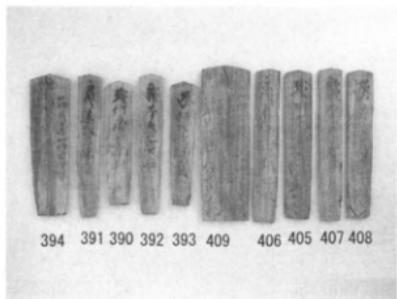
274



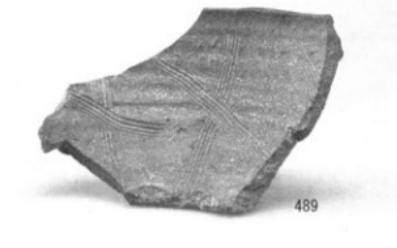
309



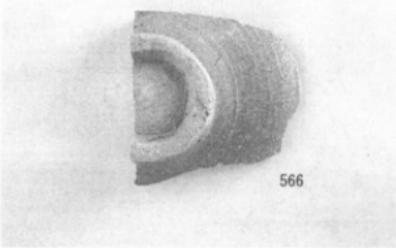
335



397



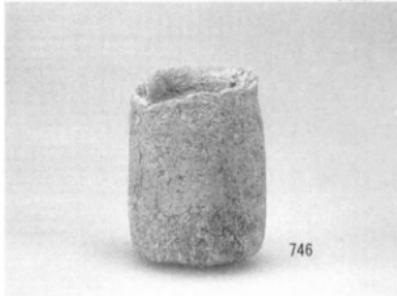
489



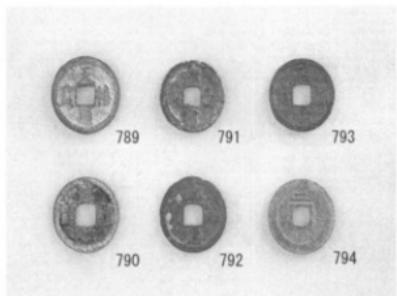
566



704



746



789

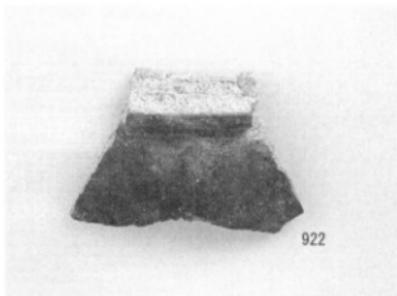
791

793

790

792

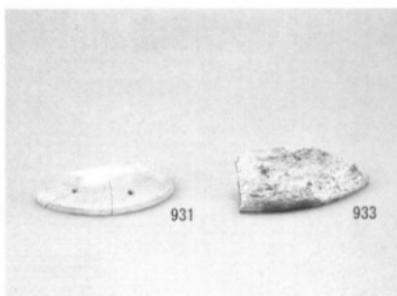
794



922

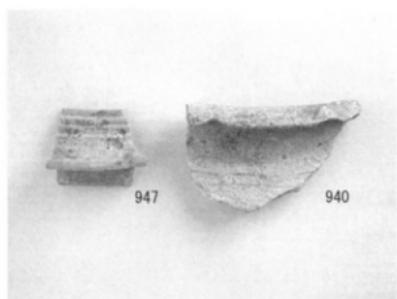


926



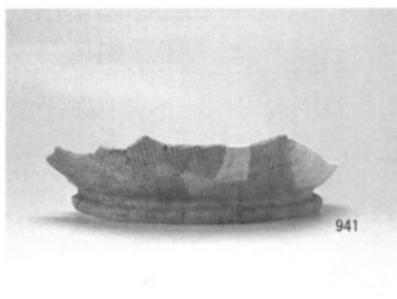
931

933



947

940



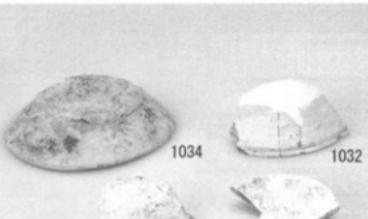
941



952



1006



1034

1032

1040

1036

1047

1045

1044

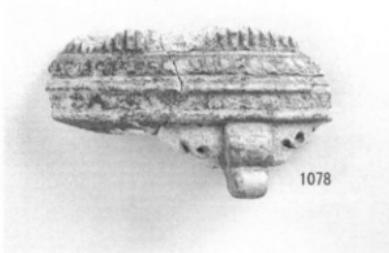


1061

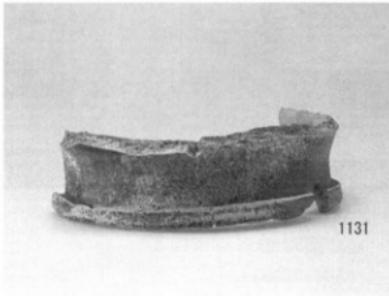
1065



1129



1078



1131



1136



1138



1173



1199

1200



1204



1258



1307



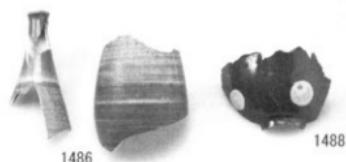
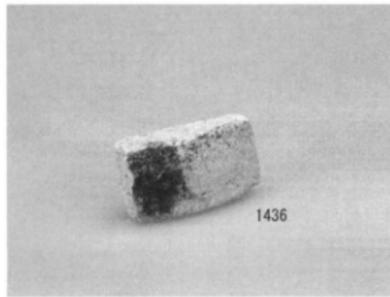
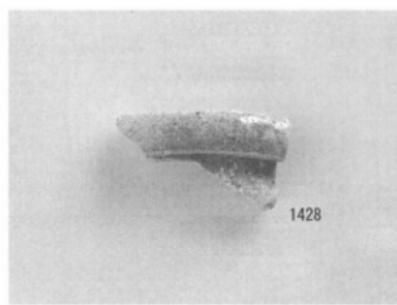
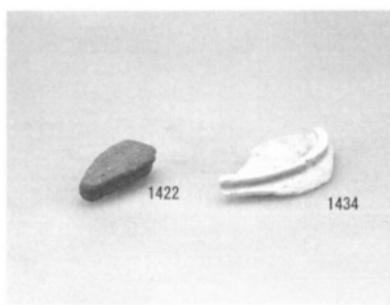
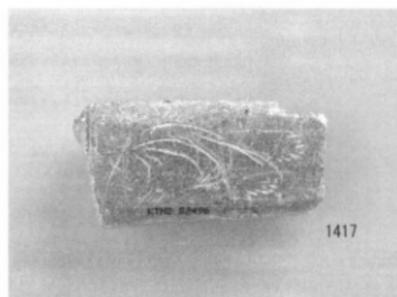
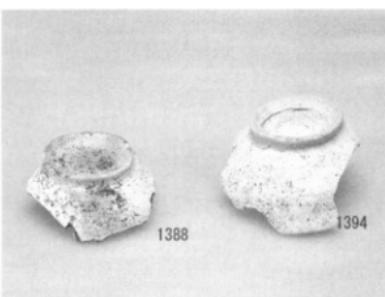
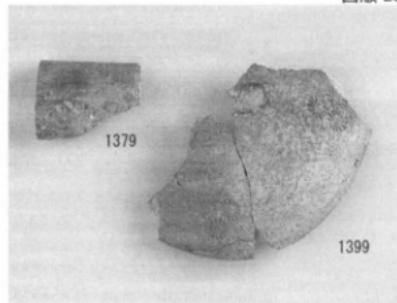
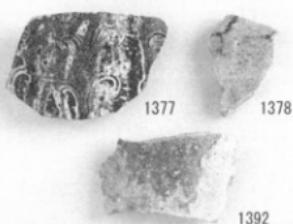
1311



1376



1403





1489



1560



1571



1575



1605



1606



1607



1624